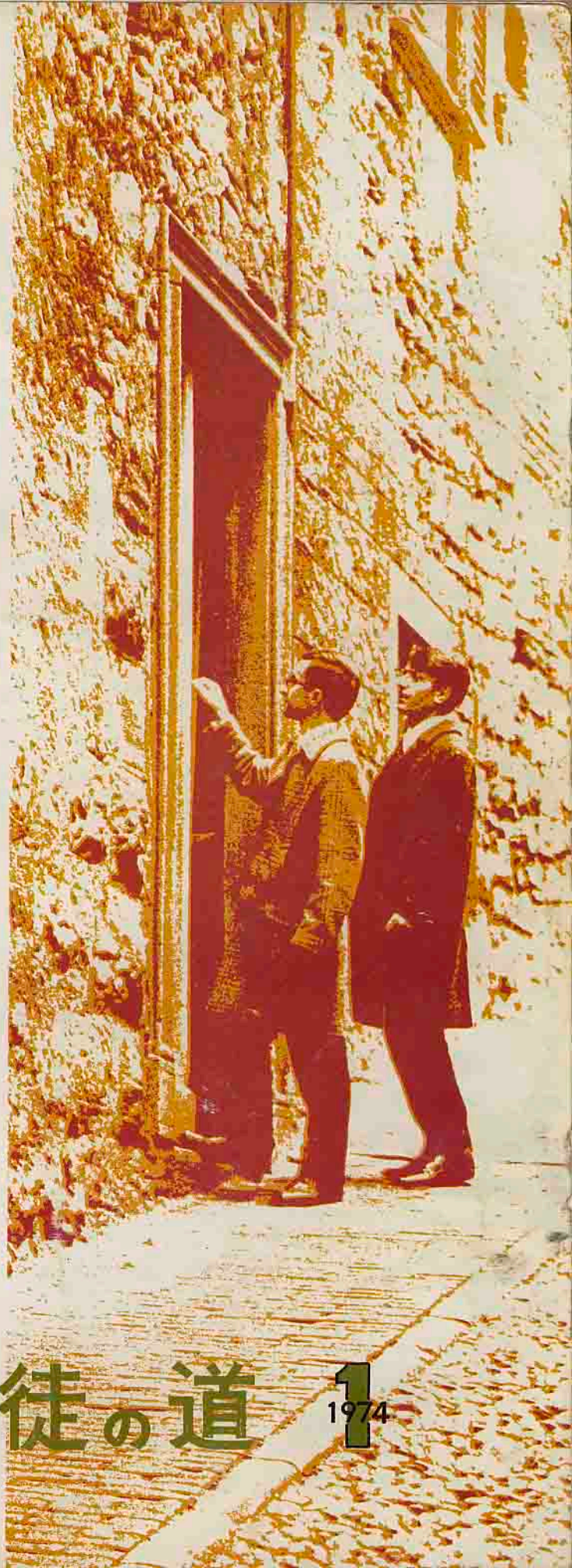


聖徒の道

創刊号 1月20日発行（毎月1月20日発行） 第18巻1号
1974年11月18日発行（郵便料）



聖徒の道 1

1974

聖徒の道

1974

1 月 号
宣教師特集号

伝道に力を注ぐまことの教会…… 1 ……リグラン・リチャーズ	
若人への言葉／	
今こそ準備のときである…… 4 ……スペンサー・W・キンボール	
王 竹玲…… 7 ……マラン・R・ジャクソン	
伝道活動についての	
ゴードン・B・ヒンクレー長老との会見…… 8 ……聞き手：ブライアン・ケリー	
靴の中のチラシ…… 12	
教会歴史中の宣教師…… 14 ……レオナード・J・アーリントン	
キリストの無尽蔵の富を	
分かち合いなさい…… 18 ……レックス・D・ピネガー	
使徒からみなさんへ…… 21 ……ボイド・K・パッカー	
歩けるようになった足なえ…… 23	
タツノオトシゴ…… 24	
おもちゃばこ…… 25	
マニラの花売り…… 26 ……アグネス・M・ファエロ	
末日聖徒イエス・キリスト教会	
の伝道部…… 29	
予言者からの召し…… 30 ……リンダ・シェリー	
教会幹部の話／私の改宗…… 32 ……ハートマン・レクター・ジュニア	
ユダヤの平原で…… 35 ……ブルース・R・マッコンキー	
「汝らはわれと同じ人物	
ならざるべからず」…… 39 ……マリオン・D・ハンクス	
人の自由意志…… 42 ……ジョン・H・バンデンバーク	
ローカルニュース…… 46	

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプラー
リグラン・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
 (内務伝達部長)
ジョン・E・カー (配送・翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
 (教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
 (教育資料担当主幹)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ

聖徒の道 1 月 号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布 5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
 東京都港区南麻布 5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1 部 130円
 海外予約 1,800円

伝道に力を注ぐまことの教会

十二使徒評議員会会員

リブランド・リチャーズ

末日聖徒イエス・キリスト教会が主張する事柄は当然世に宣べ伝えられなければならない事柄である。なぜならば、それらは主御自身が天より、また古代の予言者を遣わして明らかにされたからである。実に古代の予言者たちが地上を訪れて、予言者ジョセフ・スミスに彼らの持つ神権時代の鍵を渡したのである。もし私たちが宣言しなければ、世の人々はこれらの事柄を知るすべがあるだろうか。

使徒パウロは次のように語っている。

「信じたことのない者を、どうして呼び求めることがあろうか。聞いたことのない者を、どうして信じることがあろうか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことがあろうか。

つかわれなくては、どうして宣べ伝えることがあろうか。『ああ、美しいかな、良きおとずれを告げる者の足は』と書いてあるとおりである。」(ローマ10:14, 15)

クリスチャンはみな、キリストがこの地上に再び戻って千年間統治される日を待ち望んでいる。しかし主が戻られるに先立って、備えられなければならない事柄がある。

使徒ペテロは、五旬節の翌日に、キリストを死に追いやった人々に向かって語っている。

「自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。

それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。

このイエスは、神の聖なる予言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならない。」(欽定訳使徒3:19-21)

創世以来、聖なる予言者たちの口を通して語られた万物更新を公言している教会はほかにない。かの大教会は、救い主の時代以来存続してきたと主張しており、プロテスタント教会は改革を公言している。つまり、人の知恵によってかの大教会の過ちを正そうとしたのであった。しかしこれでは、万物の更新があった後に再び救い主が来られるという、ペテロ

の宣言は成就しない。この更新を私たちの教会は主張している。

使徒たちがイエスに再臨のしるしについて尋ねたとき、救い主は地上に起こる戦争や疫病、地震、ききんなどの裁きのことを話し、さらに次のように言われた。

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタイ24:14)

ここでひとつの疑問が起こる。御国の福音は、今日地上にある数百にもほのぼのいゆるキリスト教会のどこにあるのだろうか。聖書の教えを受け入れる思慮深い人であれば、福音は回復されるはずだと考え、福音の存続や改革は期待しないに違いない。

回復に関する聖句はたくさんある。

まず、愛弟子ヨハネは、パトモス島に流されていたときに主の御使いのお告げを受けた。「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起るべきことを、見せてあげよう。」(黙示4:1) このときは救い主の死後約30年経っていた。そこでヨハネは、聖徒たちに戦いをいどんでこれに勝ち、すべての部族、民族、国語の民、国民を支配する權威がサタンに与えられるのを見た。(黙示13:7 参照) 現在それはすべての人の認めるところである。ここに当時の教会からの完全な背教が宣言されているのである。次いでヨハネは、中空を飛ぶもうひとりの御使いを見た。「彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を」携えていた。(黙示14:6) 現在これは人々の認めるところである。もしこの地上に福音が存続していたら、永遠の福音を携えて来る御使いはどんな意味があるのだろうか。これは回復をはっきり宣言するものであり、改革を告げるものではない。

ダニエルがネブカデネザル王の夢を解き明かすように求められたときにも、同じような事柄が告げられた。ネブカデネザル王はそのときすでに見た夢を忘れていた。彼は魔術士や博士たちを召したが、だれも彼の夢が何であったか告げるこ



とができなかった。そこで彼はダニエルを召したところ、ダニエルはこのように言った。

「秘密をあらわすひとりの神が天におられます。彼は後の日に起るべき事を、ネブカデネザル王に知らされたのです。あなたの夢と、あなたが床にあって見た脳中の幻はこれです。」(ダニエル 2 : 28)

彼は、末日までのこの世の王国の興亡について告げた後に次のように言った。

「それらの王たちの世に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの国は立って永遠に至るのです。」(ダニエル 2 : 44)

これは回復のことであって、改革を指してはいない。私たちの教会は、回復を公言している世界でただひとつの教会であり、私たちの主張に耳を傾けるように、世のすべての人々を招いているのである。この主張は、すべての国民に証するために全世界に宣べ伝えられなければならない。現在約 17,000 名の専任宣教師が、2 年以上の間、世界の諸国で働い

ているのはこのためである。しかも彼らは、自分自身で費用を負担するか、愛する家族や友人の援助を受けて無報酬で働いている。

イエスは言われた。「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。

神のみところを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。」(ヨハネ 7 : 16, 17)

これは私たちの言葉、私たちの宣教師の言葉を聞くすべての人々に対する約束である。イエスが言われたように、この福音は証としてすべての人々に宣べ伝えられ、「それから最後が来るのである。」(マタイ 24 : 14)

1972 年度中の改宗者のバプテスマの数は、およそ 100,000 名である。

この福音は悪人を善人に、善人をさらに良い人にする。「福音は私を内外共に変えました」と、最近の改宗者のひとり語っている。この世で真理を求めているすべての善良な人にとっては、その通りである。

主が夢によって、あるいは不思議な方法によって、どのように真理に導いてくださったか、多くの人々はそれについての証を述べることができる。南部に住んでいた私の妻の祖父はある晩、夢の中で、とても背の高い男のひとと背の低いひとがカトーパ川を上って彼のところを訪れて来るのを見た。彼らは何か非常に大切なものを持っており、それを祖父に渡すのだと言った。そしてその翌日、祖父は家に通じる道路に目をやっていたとき、夢に見たと同じように、遠くに彼らの姿をみとめたのである。彼らはモルモンの宣教師であると述べた。そして、祖父は喜んで彼らからバプテスマを受けた。

私はオランダで伝道の業に携わる機会が2度あったが、その地で宣教師たちは、ある教会の会員を大勢改宗した。彼らは牧師を愛していたが、牧師が完全な真理を知っていないことを感じていた。そこで彼らは牧師に頼み込んでモルモンの集会に出席した。その集会が終ると、宣教師たちは出口のところで牧師にあいさつした。そこで牧師は、ジョセフ・スミスを偽言者、詐欺師呼ばわりし、また思いつく限りの悪態をついた。それから家に帰って床に就いた。

彼は床に入ったが寝付かれなかった。何度も何度も寝返りを打っていたが、とうとう夜明けになってしまった。そこで彼は起き出し、モルモンの長老たちが起きる時間まで通りを散歩した。それから長老たちのもとへ行って、モルモン経を求め、それを読んで教会に入った。私も彼と一緒に幾度も伝道し、多くの集会で福音を説いた。元牧師である彼は、ジョセフ・スミスが神の予言者であり、福音が回復されたことを知っていると、立ち上がって心から証したのである。それを聞くとときに人々の心は喜びに満たされるのである。

私が監督を務めていたときに、品の良いひとりの姉妹が、伝道に先立つ面接のために私の事務所に息子を連れて来た。彼女はひとりの息子をヨーロッパの伝道部に、またひとりの娘を他の伝道部に送っていた。身なりから彼女は貧しいようであった。そこで私は、「どうしてもうひとりの御息子が帰られるのを待たずに、この息子さんを伝道に送られるのですか」と尋ねた。すると彼女の答えはこうであった。「監督、息子に召し与えられるようにしていただければ、私は伝道中息子が生活できるように致します。」

監督を務めている間、ある立派な母親にお目にかかった。彼女は何年間もきれいな白衣を着てパン屋で働き、3人の息子を伝道に出したのであった。後にその中のひとりは伝道部

長になり、他のふたりも教会で熱心に働いている。

伝道に出す息子や娘がいなかったために、伝道中の宣教師を援助する費用を出しているすばらしい会員が教会には大勢いる。また教会本部の伝道資金に献金して、財政の問題さえ解決されれば伝道に出られる若者たちに助けを与えている人々も大勢いる。

私の多くの友だちもいつもこのようにしている。ある立派な未亡人の姉妹は、これまで大勢の宣教師を伝道に送ってきた。また私のある親族は、常時10人を伝道に出すようにしているが妻にはそのことを話していない。私はそのことをいつも残念に思っている。なぜなら、彼女も彼とその大きな喜びを分かち合えるようにすべきだからである。

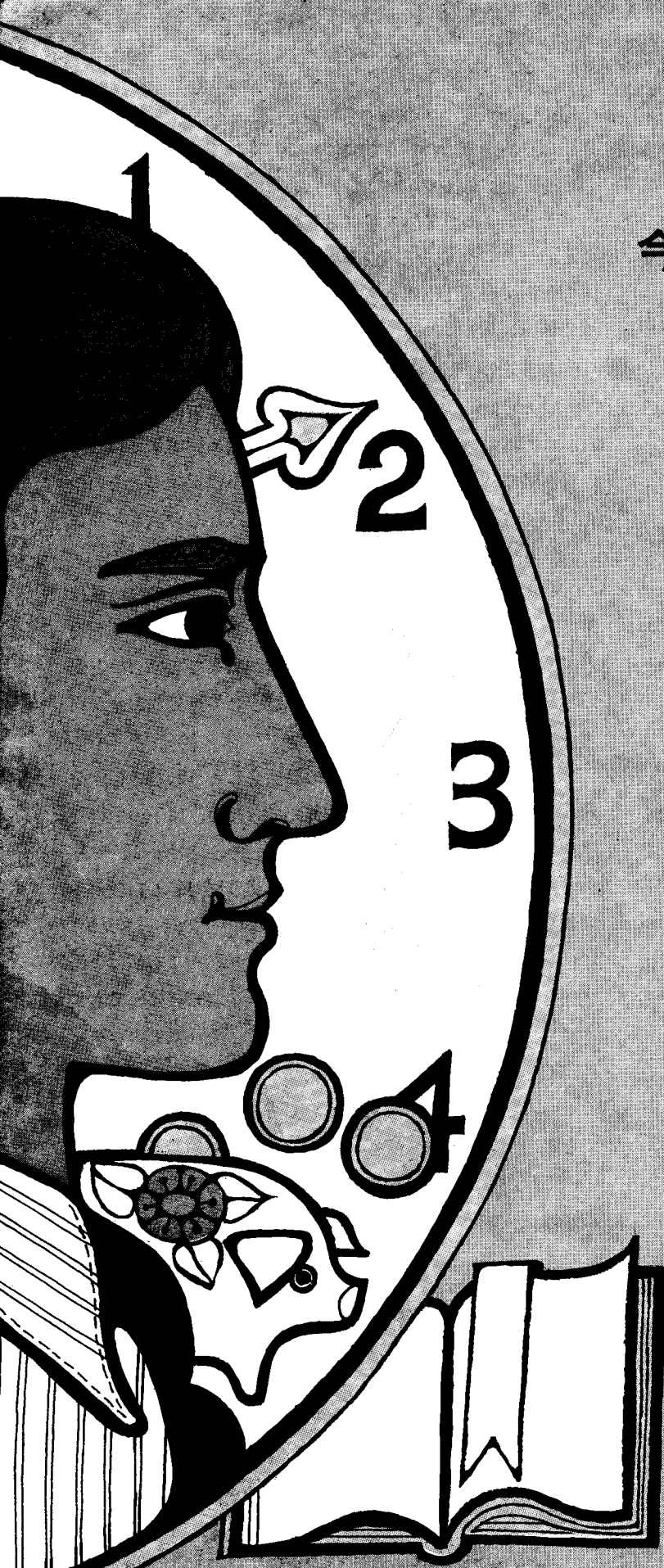
以前ある大会でこのことについて話したが、その後、私は学校教師からの手紙を受け取った。その手紙には、2年間毎月定額のお金を送るので宣教師の生活費にあててほしいと記しており、宣教師の1ヵ月分の生活費として十分なお金が同封されていた。

また最近、ある若者と伝道前の面接をしてうれしい経験をした。彼の両親はカトリック教徒であったが、息子の伝道費用を出してくれるというのである。

1971年、伝道に関して書いてあった記事に対し、14歳の少女から手紙を受け取った。彼女はの中で「リチャーズ兄弟、私は伝道に出たいのです」と書いてあった。そこで私は専任宣教師として伝道に出ることはできないが、家庭にいてもすぐにはできるたくさんの伝道方法があることを手紙で書き送った。たくさんいる教会員でない友だちとその両親を教会に招くなら、宣教師に会ってもらい、福音を聞いてもらうことができるのである。

その数週間後、私はこの少女の母親から手紙をいただいた。彼女はワード部のアロン神権YWMIAの会長をしている。それは、私がこの少女に手紙を書いたことへの礼状であり、彼女が私の助言に従ったという内容のものであった。彼女はある家族を教会に招き、その家族はバプテスマを受けることになったのである。

このような出来事は世界中で起っている。なぜなら、これは地上に神の回復された真理だからである。この真理は打ち倒されることも、他の民に渡されることもない。聖典に述べられているように、この福音はイエスが一千年間この地上を統治されるに先立つ、再臨の道を備えるのである。



— 若人への言葉 —
今こそ準備のときである

十二使徒定員会会長
スペンサー・W・キンボール

友よ、あなたは望むなら宣教師になれるであろう。

しかし「あなたが雄々しく勇敢な宣教師になれるか、それとも名ばかりの宣教師になるか。」このいずれであるかはあなたの準備にかかっている。

主は私たちに伝道の大切さについての啓示を与えておられる。

「而して汝らもし生涯今の世の人々に向けて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。」(教義と聖約18:15)

私は若人を愛し、信じている。そして若人の究極の栄えある行く末に至るまで成長するのを助けたいと願っている。

あなたは将来教会で指導者として立つ若人の大きな群れの中のひとりなのである。

今日教会には、12歳から18歳までの若い男性が約165,000人、また若い女性もほぼ同数いる。

もしこれらほとんどの若者が資格を備えていたら、青年男女および夫婦を含めて、常時30,000から40,000人が伝道に携われることになる。

伝道は特権であり機会であるばかりでなく、神聖な義務であり責務でもある。友よ、あなたは知力や能力、視力、聴力のようにあなた自身では決して得られないものを受け、その多くの恵みを被っている。あなたは「幾世代にもわたって積み重ねられてきた恵み」を一身に受けている。特に今世紀の

もたらした多くの恵みを受けている。140年以上もの間、聖徒たちは苦しみ、犠牲を払ってその文化を現在の水準にまで高めた。あなたの信仰と真理に関する知識は、過去の伝道の結果によるものであり、同じ機会を人々に与えることによってのみあなたはその業に報いることができるのである。それ故、伝道に出たいと心に大きな望みを置くことは、備えのきたすべてのふさわしい若者にとって好ましいことであり、そこから成長が得られる。もちろんこれは強いられるものではない。各人は、神権を受け、什分の一を払い、神殿で結婚し、教会で働く際に自らそれを選んで踏み行なうと同じように、このことでも自分自身が決心を下すのである。これらの事柄はすべて行なう必要があるが、しかし人には自由意志が与えられている。

世界の国々に福音を伝えるように、また各国の言葉で地の果てに至るまですべての人々に宣べ伝えるようにと、主は予言者を通して、私たちに告げておられる。私たちを除いて、国々に宣べ伝える人はこの世にはだれもないのである。また若人の数には限りがあるので、すべての会員が宣教師としての働きをする必要がある。この目的で、教会は主の命に従って全地を覆う素晴らしいプログラムに着手した。

「見よ、われは民に証し民を警めんため汝らを遣わせり。されば、その警めを受けしことあるすべての人はその隣人を警むる責任あり。」(教義と聖約88:81)

それ故、特権とも言えるこの大切な務めを果たせるように自らを備えることは、各人の義務である。人は文字や掛算九九表、大学での学業に必要な事柄を予め学ぶことによって、人生の備えをしている。それと同様に、幼年時代・少年時代すべてにわたって、青年時代の伝道と生涯の霊的成長のための備えをする必要がある。

そのためには、大きく分けて次の3つの点で準備をすべきである。

1. 清くかつふさわしい生活を続け、世のすべての罪に染まらない。

2. 真理を知ることができるように心の備えをする。

3. できるだけ自分自身の準備資金で伝道できるようにする。

1. 道徳的な生活が送れるように、ゆりかごから伝道まで福音の基本原則と清い生活の必要性についてすべての人々が教えを受けるよう期待されている。あらゆる面において完全に行なうことは期待されないにしても、家族の教育、家庭の夕べ、親子の交わり、その他の学習課程を通して、悪に向かわせるあらゆる誘惑に立ち向かい、世の悪徳からすべて離れて若い時代を過ごすことが期待されている。すなわち道徳面でのあらゆる種類の悪徳を拒み、また汚れない清さを保ち、その成長の過程において幾度も監督の目を見、自分の欲望や衝動、情欲を十分に制し、主の神聖な御言葉を宣べ伝える資格を今持っていることを真心から監督に告げることができるようにと望まれているのである。

ある出来事のためふさわしさを失うようなことがあったら、その人に監督とステーク部長、教会幹部から認められるだけの十分な期間、完全に悔改めを示し、「新しい心」を持った「新しい人」サウロのようにならないなければならない。そして立派に務めを遂行できるよう準備する必要がある。赦しに関して言えば、重大な罪を犯した人は皆、悔改めの本当の意味、すなわちそれがよいことを行ないたいという単なる望みをはるかに越えたものであることを知るように熱心に務めなければならない。私たちは、赦しは適当な悔改めがなければいかなる人にも決して与えられないことを知っている。アルマは次のように説いている。「霊の生命のように永遠の罰が定めてなかったならば、人は悔改めをすることができなかった。」(アルマ42:16)

悔改めの生ずる前に、深い罪の意識がなければならない。また実際の罪の意識には、心と霊の苦しみ、時には肉体の苦痛さえ伴う。揺らん期から絶えず教えを受けている者は、不純、不浄な状態に踏み込まなければ、罪を犯すことはないことを認めるに違いない。

2. 人は教え導く備えができるように、聖典を研究し、熟考し、学び、自分の証を強めなければならない。「もし汝らに備えあらば怖ることなからん」と主は言っておられる。揺らん期から成長の期間すべてにわたって、補助組織やセミナー、インスティテュート、家庭の夕べ、聖餐会、その他において教えられる教えが、青少年から恐れを取り除く備えとなるようにというのが、私たちの希望である。伝道に従事しようとする人は皆、すぐにふさわしい業を果たせるように、教えを受け、訓練を受け、学ばなければならない。福音や教義、組織に関して無学な若者がいてはならない。子供達は活用できるような聖句を十分かつ継続的に学び、青少年は教義を学んで吸収するようにする。

霊的な事柄を最優先に学ぶべきこのときに、多くの若者がほとんど必要以上にまで学業に力を入れ、教会の責任を怠りさえするのはなぜだろうか。優先順を考慮しさえすれば、すべての必要を満たす時間はあるのである。

伝道に行く年齢に達しても、福音に関することであれ何であれ、とにかく無知であることは、とてもありそうもないようなこっけいなことである。確かに若者は19歳に達する時までに、家庭での月なみな務めから、宣教師としての大切な務めに進む備えができなければならないのである。そのときになって、急に人生や標準やしつけのすべてを改めるようになってはならないのである。

3. 男児の出生と共に、両親は伝道資金の貯金を始めるとよい。それぞれ将来の宣教師が出生当時から伝道のために貯金することは、何とすばらしいことであろうか。両親が彼の

ために預金口座その他を設け、子供に収入があるたびにその一部を伝道資金に入れさせるようにするのが理想的である。これは伝道資金を増すだけでなく、精神的な強さを培うのに役立つ。そしてこの少年はやがて従事する伝道にいつも心に向けることになる。このことは彼に勇気を与えるであろう。伝道資金を貯えるには、アルバイトやその他数多くの方法がある。これは、目の欲望のみを考える人々の心に反省を促す。子供に手にしたものをすべて使うことを許したら、その利己心は彼が墓に入るまでも伴い続けるであろう。

すべての少年が自分自身の伝道費用をすべて、あるいは大部分貯えて伝道し、そこから多くの祝福を受けることができるとは、何とすばらしいことであろうか。

もちろん、十代のときに改宗した少年にとっては、貯金の年数は限られる。経済水準が低く、機会が非常に限られる国に住んでいる場合でも、その少年はこの方法を採用入れ、最善を尽くすことが可能である。

宣教師自身の伝道資金の準備と同様に、その家族の出資も重要である。家族も本人も全く費用を出さず、外部から全額援助を受ける人は宣教師の召しを受けられないであろう。

労賃の非常に安い国や、家族が重大な経済上の問題をかかえて、伝道費用を出すのが困難になった場合、地方部やワード部、支部、ステーク部、伝道部に神権定員会がある。それら定員会の大切な働きのひとつは、伝道資金の調達である。また教会には、緊急時に使うことのできるふたつの基金がある。

すべての少年と、多くの少女、ならびに夫妻は伝道に従事すべきである。将来宣教師になろうと思う者は、真心から、効果的に、また十分に、この偉大な伝道活動に携われるように、道徳的、霊的、知的、経済的な面でいつも備える必要がある。



王竹玲

台湾伝道部

マラン・R・ジャクソン

竹玲は天のお父様を愛しています。そして自分の信仰に従って生活しています。まだ15歳ですが、主の器となって大勢の人を教会に導きました。1973年4月1日に50人がバプテスマを受け、さらに200人がもう間もなくバプテスマを受けます。

竹玲のお父さんの王天徳（ワンチュンテ）は商売をしていましたが、18年ほど前に、余生をイエス・キリストの教えの伝道に費やそうと決心しました。彼は閉店セールの売上金で土地を買い、台湾南部の蚵寮（カリョウ）村に小さな教会を建てました。そのあとすぐに教会の裏手に家も建てました。竹玲はこの家で、8人兄弟の末っ子として生まれました。

1972年の5月に、竹玲が台湾の高雄（カオシュン）市の通りを歩いていると、ふたりの外国人が通行人ひとりびとりに紙きれを手渡していました。彼女も一部渡されて読むと、そこにはイ

エス・キリストの福音の回復について書いてありました。次のページは、高雄支部宛の照会カードになっていました。竹玲は福音の教えの中で手厚く育てられていたので、このときみだまに動かされ、回復ということについて勉強しようと思いました。竹玲はカードに記入して返し、それからすぐに長老たちの訪問を受けました。彼女は話を聞いたそのときから、この福音が真実であるを知って、バプテスマを受けたいと思いました。

お父さんは竹玲の願いが理解できませんでした。竹玲には自分がすでに洗礼を授けていたのです。でも竹玲が末日聖徒イエス・キリスト教会についてさらに話すと、彼も回復のおとずれを受け入れました。

1973年4月1日、竹玲は両親と蚵寮教会の62人の信者と共に高雄の教会堂へ向かいました。その日、竹玲は目に涙を浮かべて、父母が伝道部長からバ

プテスマを受けるのを見ました。また幼ない頃から愛してきた48人の人たちがバプテスマの水に沈む姿を見て、喜びはあふれるばかりでした。

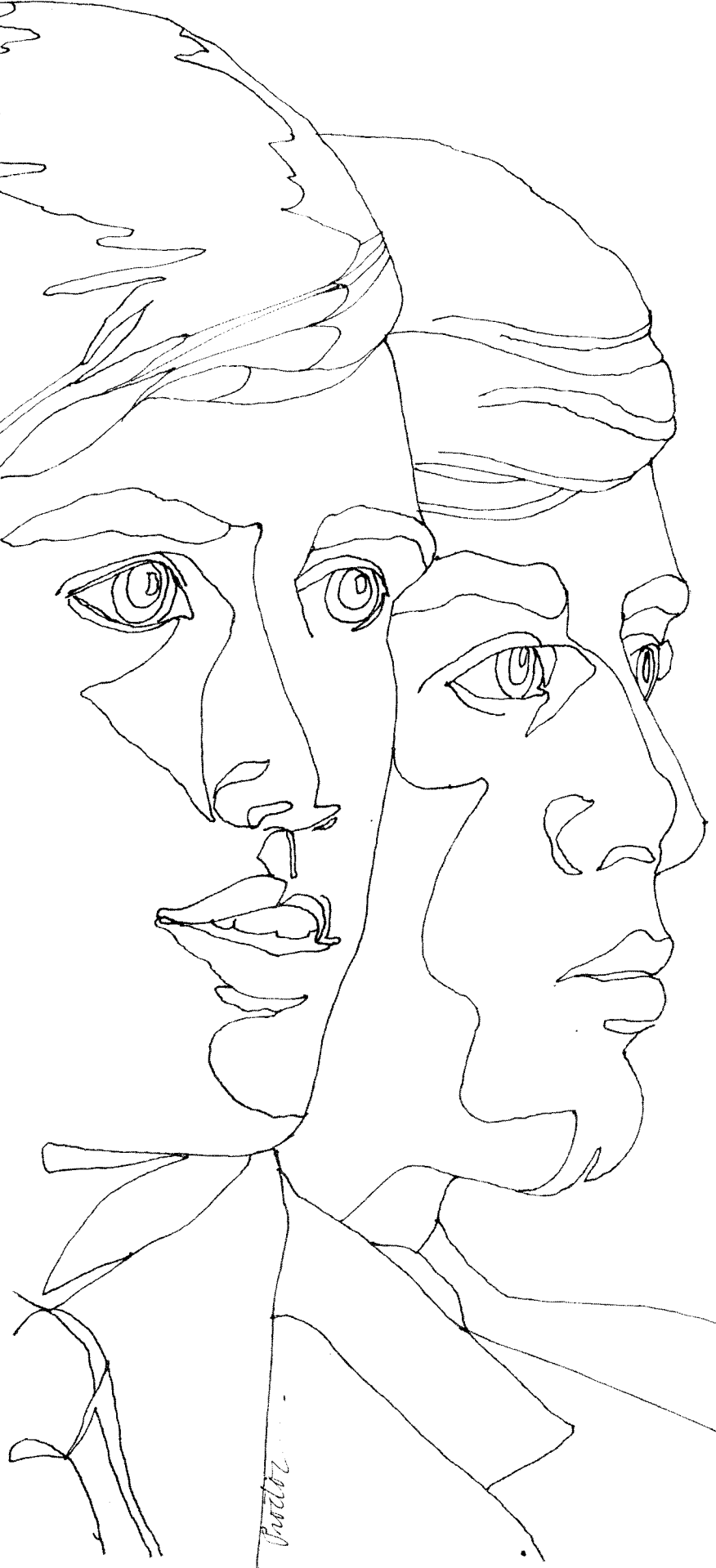
竹玲は信仰に従って生活しています。なぜ別の教会に入ったのかお父さんが理解できなかったとき、竹玲は勇気を持ってわけを話し、証を述べました。15歳の少女の力と勇気と証により、大勢の人がそろって末日聖徒イエス・キリスト教会に加入したのです。それは竹玲が教会員になってわずか数カ月後のことです。私たちは竹玲の模範に従うことができるでしょうか。宣教師になれるでしょうか。そうならなくてははいけないのです。私たちによっても大きなことは起こります。私たちを通して、大勢の神の子供がバプテスマを受けて教会に入ることがあります。忠実に、勇気を持って、戒めを守り、証を述べて下さい。

伝道活動についての ゴードン・B・ヒンクレー長老 との会見

聞き手／主筆
ブライアン・ケリー

質問：私たちは教会歴史で伝道事業の困難さをたびたび耳にします。偉大な宣教師たちのことや、彼らがどのようにして苦難を乗り越え、驚異的な人数にのぼる改宗者を教会に導いたかを聞きます。現在の宣教師に課せられるチャレンジは過去の人々と違っているのでしょうか。

ヒンクレー長老：伝道活動には常にチャレンジが付き物で、それは将来も同じことです。環境や姿勢は変わりましたが、基本的には伝道活動は、いつの時代もまったく変わりません。伝道活動は教会設立に先立って行なわれたとつけ加えるべきでしょう。モルモン経が初めて出版されたとき、それを



信じた人の中には、他の人に教えたり証する人がいました。

現在多くの人が、教会初期の時代を収獲の時代、そして現代を落穂拾いの時代と考える傾向にあります。しかし実際に教会歴史をよく調べれば、すばらしい成功を収めた初期の宣教師たちも大きな失望を経験したことがわかるでしょう。

過去を美しく見ることは人間の性癖ですが、現在福音を説く人の言葉に耳を傾けない人が多いのと同じように、過去にも有能、偉大な福音の代弁者に耳を貸さなかった人々が大勢いたことにも注意すべきでしょう。

質問：今日の成果は昔の成果とどう比較されるでしょうか。

ヒンクレー長老：一般的に言って、今の伝道活動は過去の大半の時代よりも成果が大きいと言えます。もちろん地域によって違いますが、昔大勢の改宗者を出した地方が、現在は比較的少数の改宗者しか出していないということがあります。また、昔は伝道が始められていなかったり、伝道されても実りの少なかった地方で、現在ではめざましい成果を上げているところもあります。

質問：では、どの時代の宣教師も共通して経験することと言ったら何でしょうか。

ヒンクレー長老：伝えることは常に同じでした。福音を教わった人、教える人に対して、いつも敵の力が働きました。伝道活動は決して生やさしいものではありません。でも、その喜ばしい報いに匹敵するものは何也没有什么。イエス・キリストの福音のように貴重なものは、あらゆる努力と時間や手段を捧げて教えるだけの価値があります。

質問：平均的な宣教師をとって見て、昔の宣教師のように伝道に対する霊性や知識の点で備えができていますか。

ヒンクレー長老：教会初期の宣教師がどうであったかは、じかに接していないので当然お話できません。私は40年前に伝道に出ましたが、それ以前のことは書物で知るだけです。世界中ほとんどの伝道部で青年男女と共に働いてきて感じるのに、概して、現在伝道に出る人は40年前に私が伝道に出たときと同じ位熱心で、準備は恐らくもっとしているだろうと思います。

質問：福音を広める機会は40年前と比べて変わりないでしょうか。

④ ヒンクレー長老：機会は現在の方が大きいと思います。ほとんどの伝道部がずっと働きやすい環境になっています。わずか40年の間にずいぶん変わりました。世の中の偏狭さが少な

くなったと思います。昔より寛容になりました。また幾つもの大きな教会が、信者の霊的欲求に応えるむずかしさを経験しています。多くのキリスト教徒が満たされない気持ちを感じています。彼らは自分が持っているものだけで幸せを感じないため、回復された福音の教えに心を開きやすいのです。

質問：現在の教会に対する人々の偏見についてはどうでしょうか。

ヒンクレー長老：総じて、現在の教会は良い評判を受けています。特に北アメリカにおいて。ほとんど無知から来た昔の偏見はなくなりつつあります。もちろん地理的に例外はありますが。しかし大半の人は、私たちが正直で信仰深く、キリスト教の原則を守る民であると考えています。また多くの人が現代社会における家族の大切さを認めており、そのような人たちは私たちが家族を重んじることを快く感じています。

質問：そのような新たな理解を得たことの理由は何なのでしょうか。

ヒンクレー長老：現代は以前よりも私たちの姿が衆目にさらされています。旅行する機会が増え、書物もよく読むようになり、その結果理解が深まっていくわけです。教会は発展しさらに発展すればするほど人々に知られます。教会員数が多くなるので、人目につく機会も多くなります。世界中に及ぶ建築プログラムが、教会に対する理解という点ですばらしい働きを示しています。私がある伝道部に行ったとき、建物はごくわずかしかなかったありませんでした。英国諸島全域で確かひとつしか教会がなかったと思います。教会の美しい礼拝堂は、教会に対する世の人々の印象を良いものにしていって大きな貢献をしています。現在大半の教会員や宣教師は、友だちや、求道者を招く場所を持っています。これは大きな利点です。また、新聞、ラジオ、テレビが教会の活動に注目し、従来以上に事実に基づいて、すなわち好意的に報道しています。

質問：伝道事業の実際的な方法に大きな変化がありましたか。

ヒンクレー長老：大きな変化はありませんが、教会員にも福音を宣べ伝える責任のあることが新たに強調されるようになりました。神権コーリレーションが刺激となり、手段を提供しています。すなわち求道者を見つけるという教会員の義務や関心を、実際に教える宣教師の働きや責任に結びつけているわけです。

私たちはずっと以前から、最も有力な伝道手段は立派な教会員たちだということを認識してきました。

現在、人々が生活のあらゆる領域にあって教会を代表しています。傑出した人々、業績を残している人々、才能を広く

認められている人々、教会に誇りを持つ信仰篤い人々。当然のことながら、このことが教会の印象を良くするのに非常な働きをしています。それは福音を人々に広める上での大きな試金石です。

質問：現在の宣教師に課せられる最大のチャレンジは何でしょうか。

ヒンクレー長老：現在の宣教師の最大のチャレンジは、仕事に没頭して我を忘れる、己を捨てるということです。私たちはだれでも少々怠けたり、利己的になったりしがちです。だれでも楽をしたいものですが、勤勉は伝道活動の核心です。それは救い主の時代から変わっていません。救い主はこう言われました。「……わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。」（マルコ 8：35）これは特に伝道活動にあてはまります。常に変わらぬ最大のチャレンジは、祈りをもって主の御前に行き、力と能力と導きを願い、そののち伝道に赴き、働くことでした。主は言われました。「神の栄光をまごころもて仰ぎみて、信仰、希望、慈悲、仁愛の徳を有つ者は、神の業に仕うる資格あり。」（教義と聖約 4：5）宣教師がただ神の栄光をひたすら仰ぎみて働くならば、怠惰の闇、罪の闇、引き延ばしの闇、恐れなどの闇が消え去ります。これらは皆、伝道活動に影響を及ぼす事柄なのです。

質問：伝道にはだれでも出るべきですか。

ヒンクレー長老：フルタイムの伝道にだれでも出るべきだとは思いません。伝道の仕事は厳しいものです。多くのことが要求されます。むずかしい仕事です。昔も容易なことではなかったし、将来もそうでしょう。強健な体と強固な精神と霊の強さが要求されます。現実には、フルタイムの伝道に出るべきでない人が幾らかいることを認めざるを得ません。出られない人は、能力がなくて伝道に出られないと落胆してはいけません。私たちには主に受け入れられる奉仕の方法がたくさんあります。

しかしながら、教会員全員が、伝道に出て福音を教えるだけの資格ある生活をしなくてはならないと、強く感じます。そして私たちは自分の資格について、教会役員の判断による結果をおおぐのです。もし監督があなたは伝道に出ない方がよいと感じたならば、私たちはその判断を受け入れ、自分にできるほかのことをするべきです。神の王国建設のための働きはたくさんあります。もし若い人たちが全員が伝道に出るのにふさわしくなろうと努力するならば、普通に生活していても、伝道の機会があるときに、福音を立派に教えることができるでしょう。

質問：女性も伝道に出る計画を立てる必要があると思いますか。

ヒンクレー長老：伝道に出ている女性はすばらしい働きをしています。立派な宣教師です。しかし私は、デビッド・O・マッケイ大管長の次のような言葉を何度か耳にしました。「伝道活動はまず第一に神権者の責任である。そのため、伝道は



まず神権者の手に任せられる。」「若い女性にできる最も素晴らしい仕事は、主の宮居で立派な青年と結婚し、良い子供たちの母親となることである。」しかし、繰り返しますが、教会には女性の宣教師が必要です。彼女たちは素晴らしい働きをしています。

質問：伝道については、「人生最良の2年間だった」という以上のものがあると思います。そういう深い何かは簡単に得られたり、準備なしにやってくるものではないではありませんか。

ヒンクレー長老：多くの青年にとって、伝道は一生で最大のチャレンジと言えると思います。彼らは、大半が教えに無関心な世の中に召しを受けて出て行きます。どのような天候の下でも、外へ伝道に出かけます。新しい生活環境に適応しなくてはなりませんし、故郷を遠く離れて、正常の社会生活と決別します。これらはどれをとっても容易なことではありません。置かれた境遇全体が、信仰や謙遜に加えて、非常な適応力と克己心を要求します。彼らはひざまずいて主の助けを願う必要を感じます。このようなことのすべてから、伝道中のみならず生涯にわたる、はかりしれない貴重な特性が得られるのです。私たちは皆、克己心と高潔とを開拓しなくてはなりません。それらの性質を築くのに伝道ほど素晴らしい機会はありません。

質問：家に残る人たちはどうでしょうか。兄弟姉妹、友だちはどうしたら宣教師を援助できますか。

ヒンクレー長老：まず家からの手紙です。手紙のなかなか書けない家族がありますが、家からあまり手紙のこない宣教師のことを考えるとかわいそうになります。大体週に一度は手紙を書くことにしたら良いと思います。しかしあまり多すぎても、宣教師のやる気をそぐことがあります。宣教師が立派な働きをするためには、家から離れてひとり立ちしなくてはなりません、ですから、受け取る手紙は宣教師の行動や感情に大きな異和感を生じさせますし、家のもめ事を書いたり問題を並べたてたりした手紙は、宣教師の気持を消沈させます。賢明な人はきっと良い気持を書きつづるでしょう。その宣教師をどんなに誇りにしているか、彼の働きのために自分たちが主からどんな祝福を受けているかなど。そのような手紙は宣教師の生活に祝福をもたらします。

質問：友だちはどのようにして援助できますか。

ヒンクレー長老：宣教師に友だちがいるのは当然です。励ましの手紙は宣教師の大きな助けになります。

質問：ヒンクレー長老は御自分でも伝道を経験され、現在父親として御子息を伝道に出しておられますが、そのお気持ちをお聞かせ下さい。

ヒンクレー長老：息子が伝道しているという気持は、たえようがありません。毎週手紙が楽しみで、伝道中の経験を読むと胸が躍ります。宣教師の息子を持つことにより、留守家族にいろいろな不思議なことが起こります。

質問：伝道がその後の生活に良い影響を与えたということをよく聞きます。長老は伝道で学んだことを思い出すことがおありですか。

ヒンクレー長老：伝道の精神をつかんだ宣教師ならば、だれでも多くのことを学び、一生を通じてはかりしれないほどの価値を持つ徳性をいろいろ伸ばします。

克己心が養われます。青年の生活にとってこれほど望ましい性質があるでしょうか。彼は仕事の大切さを学び、朝早く起きて仕事を始めることの価値を知ります。第一のことを第一にするということを学びます。人々と接したり話したりする態度や能力が伸びます。多くの人を悩ますいろいろな恐怖心が克服できます。積極性と柔軟性が養われます。

また、実際の経験により、祈りが聞かれ、答えられることを知ります。父母に対する愛が増します。心に感謝の気持が深まります。献身と無私の精神が身につきます。

最も大切なことは、天父と主イエス・キリストを知って愛するようになり、その確信を持って生ける神とキリストのことを証します。これらの修養と態度と知識は、その人がさらに開拓し続ける限り、その全生涯および周囲の人々の生活に祝福となるでしょう。

質問：宣教師と一緒に働いて来られた経験から、私たちに人々を改宗に導くさらに効果的な新しい方法を開発できると思いますか。

ヒンクレー長老：私たちはいつも有効な手段を使ってきました。世はそれを認めませんが、確かに存在します。それは聖霊の力です。もちろん私たちは宣教師の働きを助けるより良い方法を必要としていますし、常にそれを捜していますが、つきつめてみると、伝道活動とは相手の目をみつめて心から証を述べる、ということなのです。その証は心から心へみたまによって伝われます。それが改宗の真の姿です。新しい教え方はあるでしょう。新しい人の捜し方もあるでしょう。しかし改宗は証する人と聞く人の心に宿るみたまの力によるのです。人は福音が真実であることをみたまの証によって知ります。いつもそうでした。これからもそうでしょう。「神に関することは神のみたまによって知る。」これが全伝道事業の総括であり真随です。

靴の中 チ ラ シ

ジョン・A・ウィットフォアは、1872年1月31日、ジョン・A・ウィットフォアとアンナ・カーリン・ガーデン・ウィットフォアの息子として、ノルウェーのトロンヘイム、フレヤ島ダローで生まれた。

ジョンは母親と弟と共に（父親はすでに死んでいた）合衆国に渡り、ユタ州ローガンに住み、そこで若い頃教育を受けた。優秀な学生であったジョンは、後に合衆国東部の名門ハーバード大学に入学し、優等で卒業している。また化学の分野では、世界的に名を知られている。

1921年3月17日、十二使徒に召されたときには、ユタ大学の学長であった。偉大な作家、編集家、福音研究家として、ウィットフォア長老は教会に大いに貢献し、1952年11月29日に世を去った。

次の話は、母アンナ・ウィットフォアが教会に改宗した時の話である。一介の靴屋がどのように宣教師たらんと考え、行動したかが、よく表われている。伝道精神を抱いた一会員が、後に主の使徒となった息子を持つ婦人に福音をもたらしたことによって、何と多くの人々の生活が祝福されたことであろうか。

ある日、（ジョン・A・ウィットフォアの）母は、昔からその町に住んでいる隣家の船長に、息子の靴を修理してくれる人がいないかどうか尋ねた。すると、オラウス・ジョンセンというとても腕のいい正直な靴屋を教えてくれた。そして靴屋の息子のアーントは、船長の靴を届けに来たときに、その靴を持って行ってくれた。修理が終わって靴が返ってきたとき、その中に教会のチラシが入っていた。それから少し経ったある日、母は修理しなければならぬほかの古靴を入れた包みを持って、歩いて30分もあるジョンセンの靴屋を訪れた。それは1879年の春の日ざしの暖かい日のことである。彼女は自分が人生で最も決定的な訪問をしているとは思わなかった。さらにそれが最も決定的なものになると、だれが言えたであろうか。生涯の出来事はつづれ織りの糸のようなもので、全部が一緒になってはじめて模様や絵が織り出されるのである。

オラウス・ジョンセンは、堅実で、40代の割には話好きの、自分の職業をわきまえた人であった。彼の妻はたくましく、まさにノルウェータイプの婦人であった。母アンナ・ウィットフォアはまず彼女に、例のチラシのことを尋ねた。ジョンセン夫人は、あれは真理を述べているのです、と言っただけであとは夫のジョンセンが説明するでしょうと口をつぐんでしまった。

店の主人は靴に底革を打ち、元気の良い子供が動き回っても大丈夫なようにしておきましょう、と言った。仕事の打合せはすぐに終わり、母アンナは店を出ようとしたが、最初に修理を終えて戻ってきた靴の中に入っていたチ

ラシのことが気になっていた。しかしあれこれ尋ねてみようとは思わなかった。

母が扉の掛け金に手をかけたそのときであった。主人は、幾分ためらいがちに言った。なぜなら仕事の話はもう済んでしまったのだし、彼女は客は客でもまったく見ず知らずの人だったからである。「私が、お子さんの靴の底革よりもずっと価値のあるものをあなたに与えることができると言ったら、さぞ驚かれることでしょうね。」母は驚いた。そしてまっすぐ雄々し気に立っている相手の目をじっと見つめ、言った。

「息子の靴の底革よりも価値あるものって、何ですか？ 何のことかわかりませんわ。」

主人はためらわずに言った。「聞いてみたいとお思いでしたら、救いの計画という主のまことの教えをお話しましょう。この人生でどうしたら幸福が見い出せるか、そして永遠の喜びを得るためにはどんな備えが必要かについてお教えすることができます。また、あなたがどこから来て、なぜこの地上にいるのか、死後どこへ行くのかもお話することができます。そしてあなたがこれまで知らなかった、地上にいる子供たちに対する神の愛についてお話ししましょう。これらはあなたがたがまだ御存知ないことだと思います。」

理解、幸福、喜び、愛、これらは母アンナが求めていたものであった。しかし、ここはただの靴屋である。そしてこの人は学校や教会で教える類の知識をほとんど持ち合わせない、取るに足らない人であった。母は当惑した。そして「あなたはどなたですか」とだ

け尋ねた。

「私はキリストの教会の会員で、モルモンとも言われています。私たちは神の真理を知っています。」

モルモン！ 恐ろしいことだ。知らないうちに危険なところへ足を踏み入れていた。そう思うと母はすぐさま礼を述べてその場を辞し、丘を登り始めた。

しかし家に向かいながらも、母の耳にはあの靴屋の言葉が鳴り響き、彼が話し、証したときの力強さと重々しさが思い出されてならなかった。彼は靴屋だが、普通の靴屋ではなかった。モルモンが主の真理を知っているというのは本当かしら。いいえ、そんなことがあるものですか！ 母はそのことで考えこみ、心が休まらなかった。数日後、靴屋の息子のアークが修理した靴を持って来たとき、母は靴の中を見た。すると別なチラシが入っていた。靴屋の主人は勇気ある人であった。彼は末日聖徒の義務を果たす機会を見過ごしにせず、控え目で礼儀正しく、しかし絶え間なく世の人々に証を述べていたのであった。

こうして、苦闘の2年間が始まった。

靴の中に入っていたチラシを見た母は好奇心を抱き、ある日曜日、モルモンの集会に出向いたのであった。集会は、がんじょうな丸太でできている靴屋の二階で開かれていた。そこには何人かの人たちが出席しており、ひとりの雄弁な宣教師の話は、母の心にさまざまな疑問を呼び起こした。集会で強く感じたことは、それがあまりにも幼稚な会だということであった。トロンヘイム支部の会員はあまりにも社会的に卑しい人々であった。この国では身

分の差というものがかなりはっきりしていた。母アンナ・ウィットソーは漁師の娘であったが、経済的にも道徳的にも立派な家の出であった。しかも年々豊かになって、今では技能者階級に属していた。そんなわけで、その日曜日に見たグループに入ることは、伝統を重んじる彼女の自尊心を傷つけることであった。母は福音はよく理解できたが、このようなグループに入ることは意味のないことだと考えた。何カ月か経ったある日のこと、母は真理に対する思いに心を捕われた。そして家に帰ると、部屋に静かにたたずみ、ひとりこうつぶやいた。「私はあのグループに入らなければならないのかしら？ そうなんだわ、もし真理なら、そうしなければならないわ。」

しかし間もなく、靴屋の主人や宣教師たちと教義上の問題点を討議することに夢中になってしまった。母は聖書を自分なりに理解していた。そして十分に時間をかけて、長老たちを打ち負かそうと準備を始めた。しかしそのことは結局、母自身を打ち負かすことになったのである。母は彼らのような読み方をしていなかった。こうして次第に、自分の読み方が、子供時代に教会で教えられたことによって、ゆがめられ、影響されたものであることに気づいた。そして、モルモンの宣教師たちが、聖書を正確に文字通り受け入れていることがわかった。母はそのことをとても気に入っていた。しかしそれでも大胆不敵に対抗し続けた。だがそれは何の役にも立たなかった。結局、モルモンが聖書を正しく理解していることを認めないわけにはいかなかったのである。しかし、このときでさえも

まだ準備はできていなかった。解決しなくてはならないことがほかにもあったのである。権能、啓示、教会員としての生活、その他ちょっとあげただけでも問題点がたくさんあった。そこで母はそれらを宣教師たちに尋ね、論じ合った。母は有能な宣教師に恵まれていた。その頃トロンヘイムにいた、アントン・L・スカンキー長老の福音に対する知識は広範囲でしかもしっかりしたもので、質問を浴びせる者を真理に導く彼の知恵はきわめて立派なものであった。この博識で聡明な未亡人は、長老の力を試した。そのとき、長老は福音について、自分の持てる証のすべてを母に向けたのである。こうして母は不本意ながらも、しかしよく祈り、自分が永遠の真理を手中にしていることを確信するようになった。

ついに1881年4月1日、母は初めて福音を耳にしてから2年余りの後に、アントン・L・スカンキー長老からバプテスマを受けた。フィヨルドの水際で、まだ解けずに残っている薄氷を砕いて儀式は行なわれた。水はとても冷たかった。しかし母は、昔なじみのトロンヘイムのフィヨルドでバプテスマを受け、水から上がったときほど暖かく、心地よい気持を感じたことはなかったと、死ぬまで語り続けていた。心の中の火は燃え続け、決して消えることはなかった。こうして、トロンヘイム支部の謙遜な人々はアンナの兄弟姉妹となった。母は彼らを愛し、仲間になれたことを心から喜んだ。

ジョン・A・ウィットソー著、「福音の網の中に」、[英文] P. 53—57

教会歴史中の宣教師

教会歴史家

レオナード・J・アーリントン

ブリガム・ヤング

教会初期の宣教師の信仰と勤勉さは
今もなお将来の宣教師の模範である。

ブリガム・ヤングは日記にこう書いている。「モントローズから英国への伝道に出発した。健康を害していて、手助けなしでは川までの30ロッド（約150メートル）も歩けないほどだった。川を渡るとイスラエル・バーロー氏が私を馬の背のうしろに乗せてくれ、ヒーバー・C・キンボールの家まで連れて行ってくれた。私はヒーバー家で18日まで病床に臥していた。家には病気の妻と生後わずか10日の赤ん坊を残している。子供は皆病気で、互いに看病しあうこともできなかった。……」¹

ジョセフ・F・スミスは故予言者ジョセフ・フィールドینگ・スミスの父であり、今世紀初頭の大管長であった。ジョセフ・F・スミスの父は、カーセージの牢獄で予言者ジョセフと共に殺されたハイラム・スミスである。ジョセフ・F・スミスは、家に残って妹の面倒を見るべきだと思った人もあろうが、伝道を志願した。彼は当時サンドイッチ諸島と呼ばれたハワイに召された。伝道地についた彼は、以前の



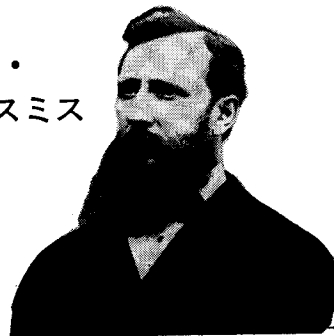
宣教師たちが福音の伝道をまったくと言ってよいほどあきらめていたことを知った。彼らはハオレと言われる白人や、さらにカナカスと呼ばれる原住民への伝道に失敗し、難しい言語が理解できず、原住民が良い教会員になるとは考えていなかったのである。しかしジョセフは若さにものを言わせて原住民の言語を学び、珍しいハワイの習慣の裏に隠されたやさしい心を知った。彼は、「たとえ独りきりになっても、そこに留り、言葉をマスターし、島々の民に警告しようと断固決心した」²と書いている。

ジョセフは言葉を習得し、ハワイ人に宣べ伝え、その過程で霊的な再新を経験した。ハワイ到着後数ヶ月して、彼はソルトレークシチーの親戚に手紙を書いた。

「私は携わっている業が生ける真の神の御業であることを知っています。いつでも、どこでも、どんな環境に置かれても、その証を述べるように準備しています。」³

そう書いたとき、彼は自分を待ち受ける事態を知てはいなかった。彼ら宣教師の衣料をしまっておいた倉庫が火事になったのである。彼らの衣類は着ているものを除いてすべて灰になってしまった。このとき、ジョセフと同僚はきちんとした背広を1着しか持たなかったのも、ひとりがその背広を着て集会に出かけるときはもうひとりがベッドにもぐっていなくてはならなかった。⁴

ジョセフ・
F・スミス





長老は伝道の「代償」にガールフレンドと頭髪を失うという昔の宣教師達の冗談は、教会初期の立派で勇敢な僕たちのひとり、ヒーバー・C・キンボールの楽しくおかしい話ともなったのかもしれない。キンボール兄弟は若いときから禿げ頭だった。人からそのことでよくからかわれたが、彼はあるとき、頭の禿げたわけを話してくれた。それは教会に入ってから間もなく、まだ青年のときのことだったという。彼はノーバスコティヤに伝道に召された。彼はニューヨークの我が家から背中に筒形のかばんを背負い、延々2,400キロ程を徒歩で旅した。

「出発してから自分に知識がないことに気がついた。出発前からわかってはいたが、いざ旅を始めるとそれがいっそう身につまされた。私は聖典の勉強を始めた。……知識がほとんどなかったもので、頭の中に学んだ事柄が詰め込まれ、はちきれそうになって毛穴が開き、毛が抜けた。あなたも私のように頭をいっぱいにすると、禿げ頭になるだろう。」

もうひとりの立派な宣教師は、のちに使徒となったパーレー・P・プラットである。1830年、パーレーは23歳で

オハイオで伝道していた。彼は伝道旅行中に不当に逮捕され、法廷に引き出された。重い罰金が科せられたがパーレーはお金を持っていなかったため裁判官は牢獄行きを命じた。夜がふけて何キロも離れた牢獄まで行く時間がな



ヒーバー・C・キンボール

かったので、パーレーは役人に連れられ、ホテルで一夜を明かした。眠りから覚め、朝食をとると、パーレーは護送役人のピーボデー氏に伴われて公共広場に行き、牢獄行きを待った。パーレーが語るその時のエピソードは次の通りである。

「私は言った。『ピーボデーさん、あなたは走るのには速いですか。』彼は

言った。『いいや、だがうちのかいブルドックは速いよ。やつは訓練されていて、ここ数年私の仕事を手伝っている。私が命令すれば、どんな人でも倒してしまうのさ。』『そうですか、ピーボデーさん。あなたは私に1マイル行かせようとしたましたが、私はあなたと2マイル行きました。私に説教したり、歌ったりする機会を与え、宿や朝食まで世話して下さいました。私はこれから旅にでなくてはなりません。走るのが早ければ、私といっしょにいらっしゃることができますよ。御親切ありがとうございました。それではお元気で。』」パーレーはそう言って猛烈に駆け出した。あっけにとられたピーボデー氏が気を取り直して後を追いかけてようとしたときには、パーレーは200メートル程も先を、垣根を飛び越え、畑をひとつとびに森へ向かって走っていた。役人は大きな自分のブルドックをけしかけてあとを追わせた。やがて犬



パーレー・P・プラット

がパーレーに追いつき、飛びかかろうとすると、パーレーは一瞬良いことを思いつき、森の方向を差し、役人そっくりのかけ声で「あっちだ、行け」と叫んだ。

「犬は役人と私にけしかけられて私を通り越し、スピードを倍にあげて森へ向かった。私たちふたりもその方向へ走った。森に入ると間もなく役人と犬の姿が見えなくなり、二度と見かけなかった。」⁶

パーレー・プラットが伝道によって被る身の危険をだれも警告はできなかったが、ひとたび危険に遭遇すると、彼は必らずそこにユーモアをみつけ出し、「損失」となるものを後で楽しい経験となる「利益」に転じたのであった。

ウィルフォード・ウッドラフも、辛い伝道にユーモアを見ることでできた人である。彼は1830年1月の彼が27歳であったときの経験について書いている。彼と同僚は食べ物なしで2日間に100キロ程歩いた。最初の日、ふたりは熊に出くわし、道に迷い、狼に追跡され、やっとのことで夜遅く小屋に着いた。食べ物は何もあてがわれなかったが、とにかく床に寝るのを許された。ウッドラフ長老はその日のことを「生涯で最も苦しく耐えがたい1日」と記している。翌朝彼らが20キロ程雨の中を歩いて、1軒の家にたどりついてみると、それは1年前にミズーリ州ジャクソン郡から聖徒を追いたてた暴徒の家であった。小屋に着いたとき、家族は朝食の席についていた。ウッド



ウィルフォード・ウッドラフ

ラフ長老の言葉を読んでみよう。

「たとえ憎い相手でも主人が食事に招いたからには食事を出すというのが当時のミズーリ人の習慣であった。…彼は私たちがモルモンだということを知って、食事を始めたとたんにモルモンをののしり出した。テーブルにはベーコンエッグの大皿とパンがたくさんのもっていた。主人の悪口は私たちの食事の邪魔にならず、悪口雑言がひどくなればなるほど、食はすすんで、私たちは満腹になった。私たちはテーブルを立ち、帽子を取って朝食の礼を言った。彼は私たちの立ち去る最後の最後までモルモンを罵倒し続けた。主は彼に私たちの朝食への報いをお与えになると信じる。」⁷

最後にあげる例は、マシュー・カウリーの生活に見られる信仰を基とした献身についてである。彼はソルトレークシチーの末日聖徒大学に通っていたが、1年を終えると来年は学校に戻る

まいと決心した。伝道に出たかったのである。わずか17歳だったが、彼は召されて、まもなくマオリ人の間で働くべくニュージーランドに向かった。

カウリー長老は日記に、最良の同僚は蚤たちだと書いている。蚤はいつも忠実に側を離れなかったからである。次の言葉はその日記の一節である。

「夜、カラキア（祈り）が終わって自分の部屋に帰り、床に入る前に蚤に対する防備を固めた。体中に蚤取り粉をなすりつけ、ひと握りをベッドにまいた。それで蚤は気を失うと思った。…（翌朝）起きてベッドを見ると、大量の蚤の死がいである。大群を征服して、私はナポレオンのような気分だった。」⁸

カウリー長老は当然のことながら言葉を全く白紙の状態から学ばなくてはならず、また3カ月間は同僚がいなかった。彼は毎朝6時に森へ行き、福音と国語を勉強し、断食し、祈った。彼は毎日そこで11時間を過ごした。3カ月後に、彼は土地の人々を前に、その地方の言葉で福音を説くことができるようになった。彼は「胸に、今まで一度も感じたことがなかったような燃える気持を感じた」と言っている。

これらの宣教師の経験からして、彼らの決定は経済学者の決定の基準と違っていたことがはっきりうかがえる。経済学者は、払う代価が利益にみあうような価値体系で決定を下す。禿げも蚤も飢えも、経済学者にとっては家族を残して来るほどの動機とはならないであろう。しかし、パーレー・P・プ

ラットの語った次の方法によるならば、伝道しようという決心は確実な損得基準に基づくのである。

その経験とする1年前、まだ末日聖徒について聞いていなかった頃、パーレーは結婚したばかりで約20ヘクタールの農場と快適な家と収穫の多い果樹園と美しい菜園を所有していた。しかし彼は何か欠けていると感じた。そこで彼は聖書を研究し、さらに知りたいと思い、福音が再び回復されなくてはならないという信念を持った。福音の回復がすでに行なわれていたことを知

らないながら、彼は農場と家をあとに真の教会を捜そうと決心した。兄のウィリアムは彼に反対し、「おまえはどうやって生活するつもりか。」と聞いた。パーレーは家族を十分に養うだけの銀行支払い手形があると言った。彼によれば、その手形は「天地が過ぎ去っても決して崩れない所に投資してある」という。兄はそれを見たいと言った。パーレーはこう記録している。

「そのとき、私は自分の金庫をあけて、中から大きい札入れを取り出した。そこには次のような約束手形がぎっしり入っていた。『わたしのため、また福音のために父、母、兄弟、姉妹、家、畑、妻、子を捨てる者はこの世においては百倍を受け、来たるべき世では永遠の生命を受ける』『あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。』『信ずる者には、どんな事でもできる。』⁹」

そしてパーレーは兄に、これが正真正銘の手形ではないか、署名人の主イエス・キリストがこれらの約束をかなえて下さるのではないかと聞いた。ウィリアムの返事は「その通りだ」のひと言であつた。こうして1830年の8月パーレーは仕事を処分し、ポケットに10ドルを入れ、妻を連れて神の王国を探しに出発した。

彼はすべての宣教師と同様に、主が自分の手形を払って下さることを知ったのであった。

脚 注

1. 「ブリガム・ヤングの一生」ミレニアル、スター、第25号（1863年10月3日）〔英文〕P. 646
2. ジョセフ・フィールドینگ・スミス「ジョセフ・F・スミスの生涯」〔英文〕P. 170
3. 同、P. 176
4. 同、P. 183—4
5. 「説教集」、1856年9月28日の説教第4巻〔英文〕P. 107
6. パーレー・P・プラット、「パーレー・パーカー・プラットの自叙伝」〔英文〕P. 50—51
7. マシアス・F・カウリー編「ウィルフォード・ウッドラフ：その生涯と働きの歴史」〔英文〕P. 50、「ウィルフォード・ウッドラフの生涯」〔英文〕P. 82
8. ヘンリー・A・スミス、「信仰の人：マッシュー・カウリー」〔英文〕P. 48
9. 自叙伝〔英文〕P. 50—51

この執筆にあたり、教会歴史記録部の編集者、モーリン・アーセンバック氏およびユタ州立大学生、ブラッド・モーリス君に御援助いただいたことを感謝申し上げる。

レオナード・J・アーリントン



マッシュー・カウリー

最も大切な務め、それは福音を教えることである

キリストの無尽蔵の富を 分かち合いなさい

七十人最高評議員会会員
レックス・D・ピネガー

親愛なる兄弟姉妹と共にこの大会に出席できることは、大いなる特権である。私は全世界で働いている大勢の宣教師を代表して、彼らの挨拶をここにお伝えしたい。各地の宣教師を訪れ、主の力を肌で感じ取ることは、素晴らしいことである。というのは、主は、宣教師と教会員を通して、イエス・キリストの福音を人々の間に行き渡らせるために働いておられるからである。

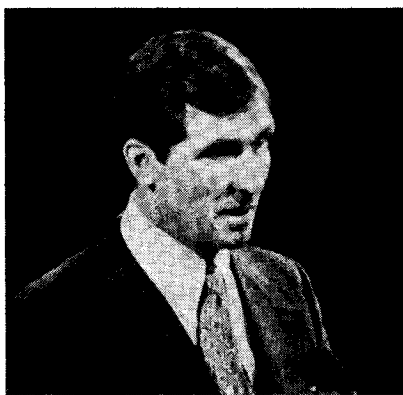
福音を分かち合って得られる祝福は口で言い表わせないものである。私が時々覚える感激は、恐らくパウロもエペソの聖徒に手紙を書いたときに味わったことであろう。パウロは、主のために仕える彼の召しについて、次のように書いている。

「わたしは、……自分に与えられた神の恵みの賜物により、福音の僕とされたのである。

すなわち、聖徒たちのうちで最も小さい者であるわたしにこの恵みが与えられたが、それは、キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝えるためである。

わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそのものである。

この主キリストにあって、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信



をもって大胆に神に近づくことができるのである。

こういうわけで、わたしはひざをかがめて、……父に祈る。」(エペソ 3 : 7, 8, 11, 12, 14)

福音を人に分かち与えたことのある会員や宣教師は、例外なく皆この謙虚な、感謝の気持で胸が一杯になるようである。福音を受け入れた人々が平安を覚え、確信をもって生活するようになっているのを見ると、私たちはそれだけ自分の兄弟姉妹である友だちや隣人に、回復されたイエス・キリストの福音を分かち与える責任と機会が、どんなに重要であるかをひしひしと感じるのである。

主は、この神聖な責任について、明確に宣言された。また教会員がこの戒

めを守らなかった場合に受ける罪の宣告も、明確にされた。1832年9月23日に、主は福音を説くことについて十二使徒に戒めを与えた後、次のように言われた。

「而して、汝らに与えたるこの啓示と誠命とは、今直ちに全世界に施され、またこの福音をいまだ受けざりしすべての人々に及ぼすべきなり。

されど、誠にわれ、わが王国を与えられたるすべての者たちに言う。……汝らより彼らに向いて宣べざるべからず。……」(教義と聖約 84 : 75, 76)

ジョセフ・スミスはかつて、私たちの最大かつ最も重要な義務は、福音を人々に教えることである、と語った。彼はまた死者のために働くことについても、同じことを宣言している。このいずれの活動によっても、神の王国の会員が得る数々の祝福を、人々に与えることができるのである。

この「隣人を警める」という神聖な責任を果たすと、贈り物を受けた人はもちろん、与えた人にも、口で言い表わすことのできない喜びが訪れる。教会全体を通じて、数多くの家族がこの最も大切な務めを果たして、喜びを経験している。彼らは、「亡びずしてその身も霊も救いを得るために庫に積み入る」ばかりか、非会員の兄弟姉妹

たちも同じ祝福にあずかれるように助けているのである。伝道する人たちは伝道が務めというよりは、すばらしい機会であることに気づいている。すなわち、主の最も大いなる業一人の魂を救う業を助けているのである。

人が主を見いだすのを助ける方法はたくさんある。ジョーンズ兄弟の家族は、主を助けるために、まずモルモン経を1冊用意し、家族の写真と証を、表紙を開いた所に添付した。そして宣教師を家に招待して、ふだん親しくしているブラウン氏の家族に会ってもらった。翌日宣教師たちは、上記のモルモン経をジョーンズ兄弟の家族からの贈り物として、ブラウン氏の家族に渡した。ブラウン氏はじめ家族の人々はこの贈り物にとっても感謝し、このすばらしい聖典を読み、よく考え、また祈りましようと言った。そして実際その通りにした。長老たちは彼らを教え、ジョーンズ兄弟の家族も絶えず友情の手を差し伸べた。今日、ブラウン氏の家族は、ひとり残らず教会員である。

最近ある小さな支部で、会員たちがその地域に福音を広めるため、あなたがたと一緒に働きたいと宣教師に申し出た。1週間に少なくとも5つの家庭集会が開けるよう、友人や隣人を紹介しようというのだった。ところが会員は、思ったよりも多くの人がメッセージを待っていることを知った。過去3カ月間、長老たちは、1日に4つから5つの集会を開いてきたのである。集会が次から次へと非常に多いので、ある宣教師は、毎週提出する報告書の裏にこう書いている。「伝道部長、教えるのにあまりに忙しいため、戸別訪問をする時間がありませんでした。でも御心配に及びません。来週頑張りますから。」

この宣教師たちは、その週、会員が紹介した友人にイエス・キリストの福音を教えるのに、65時間も使ったのだ

った。この小さな支部は集会の出席人数とホーム・ティーチングの面で、信じがたいほどの成長を遂げた。しばらく教会の集会に出席していなかった人々が、何人か今は活発になっている。会員が伝道に協力することによって、この支部の問題が幾つか解決を見たのである。

ある歯科医は、機会あるごとに福音を伝えている。診察室で患者を診察台に「くくりつけ」ながら、自動車でガソリンスタンドに立ち寄ったときに、事務所で、果ては畑の手入れのことで意見を求めに隣りの家に行ったときといった具合で、実にどこでも伝えるのである。彼は言った。「モルモン経を読んでいううちに、モーサヤの息子たちがレーマン人の間に福音を説きに行つて覚えた愛と平安がわかるようになりました。」そして彼はきっと、モーサヤの息子たちと同じ熱意を持つようになったにちがいない。

過去1年の間に、この歯科医の努力によって、宣教師は数百人の人々を紹介され、4つの家族を教会に迎えることができた。このすばらしい会員と、ホーム・ティーチャーの同僚は、絶えず宣教師の前に道を切り開き、集会を用意しているのである。この人は昔からそこに住んでいるので、自分が働きかけた方が、人々の反応がよいと考えている。この場合も、会員と宣教師が一体となることによって、キリストの福音の光と平安が、真理を求める人々の生活に浸透していった例である。

もうひとりの会員の例をあげてみよう。この人は、はるか遠く離れたバージニア州リッチモンドの友人に、手紙で福音を伝えたのだった。手紙が届いた直後に、すばらしい出来事が起こった。ある日、リッチモンドでふたりの宣教師が戸別訪問をしていた。ひとり

町を歩きながら複雑な思いであった。しかし、ふたりとも忍耐して励みたいと望んでいた。

2時間歩いて何の成果も得られなかったが、ふたりはとある1軒の家のドアをノックし、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です、と自己紹介した。「まあ、いらっしゃい。アン・スミスが送ってくれたのだね。」女の人が言った。長老たちは顔を見合せ、首をかしげると、私たちはただこの近所を1軒ずつ訪問していたのです。だれも私たちをお宅へ派遣したわけではありません、と言った。この婦人はふたりを家の中へ招き入れた。夫も子供たちも共にふたりを迎えた。

この女の人はそこで、次のような話をしてふたりを驚かせた。「ほんの1、2時間前に、私は一番の親友から手紙を受け取って、読み終わったところなのです。1年前に彼女と御主人は、末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗し、最近神殿で結婚しました。しかし教会に入る前に聞いたところでは、彼らの結婚は破綻をきたし、彼女は私に悲しみを訴えたほどでした。ところが今日10ページにわたる手紙が届いて、あなたがたの教会のことを1から10まで伝え、教会によって彼らの人生がいかにすばらしい変化をとげたかが書かれていたのです。」

この女性は宣教師たちに、手紙を見せた。そこには、扶助協会、初等協会日曜学校、MIAのこと、さらにはほかの数多くのことが紙面せましと記されていた。そして手紙の末尾に、短くこう書かれていた。「ふたりの宣教師をあなたの家にお送りし、この教会についてもっと詳しく説明してもらいたいと思っています。」

この女性は、長老たちのメッセージを聞いた後で、涙を流しながら言った。「主があなたがたを私たちの所へ送って下さったに違いありません。」

たちも同じ祝福にあずかれるように助けているのである。伝道する人たちは伝道が務めというよりは、素晴らしい機会であることに気づいている。すなわち、主の最も大いなる業一人の魂を救う業を助けているのである。

人が主を見いだすのを助ける方法はたくさんある。ジョーンズ兄弟の家族は、主を助けるために、まずモルモン経を1冊用意し、家族の写真と証を、表紙を開いた所に添付した。そして宣教師を家に招待して、ふだん親しくしているブラウン氏の家族に会ってもらった。翌日宣教師たちは、上記のモルモン経をジョーンズ兄弟の家族からの贈り物として、ブラウン氏の家族に渡した。ブラウン氏はじめ家族の人々はこの贈り物にととても感謝し、この素晴らしい聖典を読み、よく考え、また祈りましようと言った。そして実際その通りにした。長老たちは彼らを教え、ジョーンズ兄弟の家族も絶えず友情の手を差し伸べた。今日、ブラウン氏の家族は、ひとり残らず教会員である。

最近ある小さな支部で、会員たちがその地域に福音を広めるため、あなたがたと一緒に働きたいと宣教師に申し出た。1週間に少なくとも5つの家庭集会が開けるよう、友人や隣人を紹介しようというのだった。ところが会員は、思ったよりも多くの人々がメッセージを待っていることを知った。過去3カ月間、長老たちは、1日に4つから5つの集会を開いてきたのである。集会が次から次へと非常に多いので、ある宣教師は、毎週提出する報告書の裏にこう書いている。「伝道部長、教えるのにあまりに忙しいため、戸別訪問をする時間がありませんでした。でも御心配に及びません。来週頑張りますから。」

この宣教師たちは、その週、会員が紹介した友人にイエス・キリストの福音を教えるのに、65時間も使ったのだ

った。この小さな支部は集会の出席人数とホーム・ティーチングの面で、信じがたいほどの成長を遂げた。しばらく教会の集会に出席していなかった人々が、何人か今は活発になっている。会員が伝道に協力することによって、この支部の問題が幾つか解決を見たのである。

ある歯科医は、機会あるごとに福音を伝えている。診察室で患者を診察台に「くくりつけ」ながら、自動車でガソリンスタンドに立ち寄ったときに、事務所で、果ては畑の手入れのことで意見を求めに隣りの家に行ったときにといった具合で、実にどこでも伝えるのである。彼は言った。「モルモン経を読んでいるうちに、モーサヤの息子たちがレーマン人の間に福音を説きに行き、覚えた愛と平安がわかるようになりました。」そして彼はきっと、モーサヤの息子たちと同じ熱意を持つようになったにちがいない。

過去1年の間に、この歯科医の努力によって、宣教師は数百人の人々を紹介され、4つの家族を教会に迎えることができた。この素晴らしい会員と、ホーム・ティーチャーの同僚は、絶えず宣教師の前に道を切り開き、集会を用意しているのである。この人は昔からそこに住んでいるので、自分が働きかけた方が、人々の反応がよいと考えている。この場合も、会員と宣教師が一体となることによって、キリストの福音の光と平安が、真理を求める人々の生活に浸透していった例である。

もうひとりの会員の例をあげてみよう。この人は、はるか遠く離れたバージニア州リッチモンドの友人に、手紙で福音を伝えたのだった。手紙が届いた直後に、素晴らしい出来事が起こった。ある日、リッチモンドでふたりの宣教師が戸別訪問をしていた。ひとり

町を歩きながら複雑な思いであった。しかし、ふたりとも忍耐して励みたいと望んでいた。

2時間歩いて何の成果も得られなかったが、ふたりはとある1軒の家のドアをノックし、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師です、と自己紹介した。「まあ、いらっしゃい。アン・スミスが送ってくれたのかわ。」女の人が言った。長老たちは顔を見合せ、首をかしげると、私たちはただこの近所を1軒ずつ訪問していたのです。だれも私たちをお宅へ派遣したわけではありません、と言った。この婦人はふたりを家の中へ招き入れた。夫も子供たちも共にふたりを迎えた。

この女の人はそこで、次のような話をしてふたりを驚かせた。「ほんの1、2時間前に、私は一番の親友から手紙を受け取って、読み終わったところなのです。1年前に彼女と御主人は、末日聖徒イエス・キリスト教会に改宗し、最近神殿で結婚しました。しかし教会に入る前に聞いたところでは、彼らの結婚は破綻をきたし、彼女は私に悲しみを訴えたほどでした。ところが今日10ページにわたる手紙が届いて、あなたがたの教会のことを1から10まで伝え、教会によって彼らの人生がいかに素晴らしい変化をとげたかが書かれていたのです。」

この女性は宣教師たちに、手紙を見せた。そこには、扶助協会、初等協会、日曜学校、MIAのこと、さらにはほかの数多くのことが紙面せましと記されていた。そして手紙の末尾に、短くこう書かれていた。「ふたりの宣教師をあなたの家にお送りし、この教会についてもっと詳しく説明してもらいたいと思っています。」

この女性は、長老たちのメッセージを聞いた後で、涙を流しながら言った。「主があなたがたを私たちの所へ送って下さったに違いありません。」

会員と宣教師が、信仰をもって一緒に働くなら、彼らはひとつとなり、主の手にあって人々の間に主の業を起こすことができるだろう。主は上記の信仰の篤い女性とふたりの勤勉な宣教師の、双方の努力をひとつに結びつけられたのである。そして、もし受け入れるなら、測り知れない喜びと平安をもたらし、しかも天父のみもとに連れ帰る教えを、1軒の家族に伝えられたのであった。

今日、私たちは苦悩と混乱に満ちた世に生きている。多くの人が動揺し、落胆し、あるいは混乱し、もっとよいものはないかと捜し求めている。主はイエス・キリストの福音の中に、その「もっとよいもの」を提供しておられるのである。主は予言者に現われ、モルモン経をあらわし、また神権の権能と権威をもって教会を回復された。主はこのような形によって、今の時代の私たちに対して愛と配慮を示されたのである。私たちには、真理と神権の権能、権威が与えられている。従ってこの祝福を人々に分かち与えることは、私たち個人および家族の責任であり、同時に喜びである。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、英国における地区総大会で次のように言われた。

「救いの計画はひとつである。人が日の栄の王国に住むための道は、ひとつしかない。それは、この世を捨て、主イエス・キリストを信じ、バプテスマの門をくぐって神の王国に入り、さらに聖霊の賜物を受けて、主の戒めを守ることである。

われわれは、あらゆる教派、党派、宗派に属する天父の他の子供を尊重する。彼らも、啓示によりもたらされた光と知識に浴し、共に回復された福音の偉大な祝福を享受するようになることを、心から望んでいる。

しかし、われわれは救いの計画を知

「この女性は、涙を流しながら言った、『主があなたがたを私たちの所へ送って下さったに違いありません。』」



っており、福音を実践している。そしてこの福音は世界の唯一の希望でありあらゆる国々の悪を正し、地に平和をもたらす、唯一の道である。」（「聖徒の道」1972年2月P. 50, 「英国の聖徒たちへ」）

私たちは、天父のすべての子らに、キリストの「無尽蔵の富」を分かち合う責任を負っている。私たちは幸いにも、福音の祝福を人々にもたらすという、エフライムの約束を受けている。まだ王国を受け入れていない人々に、「福音を説く」よう戒められた私たちは、是非この戒めを守って、ひとつになり主の偉大な伝道事業に邁進しようではないか。

私たちは皆、友だちや会社の同僚にモルモン経を与えることができるだろう。あるいは、だれかを家に招いて天父なる神を紹介したり、また手紙を書いたり、啓示された真理の証をし、主の計画を受け入れるように勧めたりすることができる。あなたがたが、主のために伝道したいという望みを強く持ち続けるなら、主は確かに道を開かれるだろう。

私たちは全世界の人々に対して、どうぞ来て私たちと共にパウロが述べた

祝福を受けて下さい、と招待するものである。パウロはこう書いている。主は、「その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さい。」

また、信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、

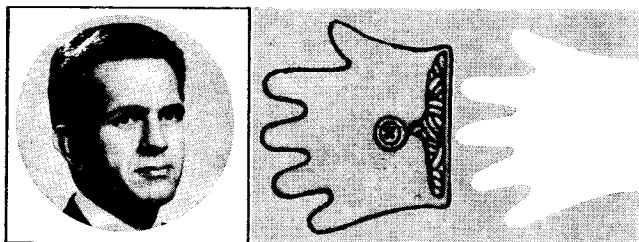
すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているものすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。

どうか、わたしたちのうちに働く力によって、わたしたちが求めた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえて下さることができるかたに、

教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくあるように……」（エペソ3：16—21）

イエスがキリストであり、この教会がキリストの教会であることを、またハロルド・B・リー大管長が今日の油注がれた予言者、聖見者であることをイエス・キリストの御名により心から証する、アーメン。

十二使徒からみなさんへ



ボイド・K・パッカー長老

わたしは、みなさんにいつもおぼえてほしいとてもたいせつなことを、お話ししたいと思います。

みなさんは生まれる前にどこにいたか、知っていますか。おとうさんとおかあさんのところに来る前に、みなさんは霊の世界にいました。

たとえば、わたしの手がみなさんの霊だとしましょう。霊は生きていて、それだけで動くことができます。

手ぶくろは、みなさんの体のようなものです。そして、それだけでは動けません。ところがその体の中に霊が入ると、動いたり、話したり、そのほかいろいろなことができます。みなさんはいま霊が入った体をもって、この世で生きているのです。

みなさんが生きている間、体の中の霊は動いたり、働いたり、息をしたりさせます。ところがわたしたちは、いつまでもこの世にいるというわけではありません。年をとったり、病気をしたり、事故にあったりして、いつか霊と体がはなれるときがきます。このとき人は死にます。「死ぬ」というのははなれること、体と霊がはなれるということです。

手ぶくろは手からはなれると落ちてしまいます。みなさんの体も、霊とはなれるともう動かなくなってしまう、死んでしまうのです。でも、見たり、考えたり、笑ったり、動いたり、何かを知るためには霊が必要です。そして霊はいつまでも死ぬことはありません。

天のおとうさまは、わたしたちのおとうさまで、わたしたちを愛していらっしゃいます。ですから、わたしたちがこの世に来られるようにしていただきました。そしてまた、天のおとうさまのところにもどれるようにも、していただきました。わたしたちは、天のおとうさまのところをはなれてこの地上に住んでいるので、天のおとうさまに会うことはできません。けれども天のおとうさまは、いつもわたしたちのこと

を思っていてくださいます。そのことを忘れないようにしましょう。

天のおとうさまは、わたしたちにたすけが必要なのをぞんじでした。そこでわたしたちをたすけるために、あるお方をこの世に送ることを計画されました。その人のおかげでわたしたちはいつかまた、天のおとうさまのところにもどることができます。

そのお方は神さまのひとり子、イエス・キリストです。イエスさまは、わたしたちと同じ霊の子どもです。でもイエスさまは、この世でただひとり、神さまによって肉体を与えられた子どもです。そして、わたしたちが生き返ることができるようにしていただきました。それでわたしたちの霊と体はまたひとつになり、復活することができるのです。復活というのは、はなれた霊と体が、もう一度いっしょになることです。これはイエスさまからのおくりものです。イエスさまがわたしたちの救い主、あがない主とよばれるのはこのためです。はなれるということについてもうひとつ知っておかなければならないことがあります。それは第二の死ということです。これは、天のおとうさまに二度とお会いできなくなるということです。

わたしたちは、いつもきれいな心をもつようにしなければなりません。そうすれば天のおとうさまからはなれることができます。そして死んでから、天のおとうさまのところへかえることができます。

イエスさまは、わたしたちが福音を守って生活すると、いつもきれいな心をもつことができると教えてくださいました。また、たとえまちがったことをしたときでも、また清くすることができます。これが悔改めです。

まちがったことをしたり、イエスさまが教えてくださったとおりにできないときがあるかもしれません。またためにあったり、がっかりしたり、はずかしいおもいや悲しいおもいをしたりすることもあるでしょう。そういうときにはイエスさまを思い出してください。そしてイエスさまのお名前によって、天のおとうさまにお祈りするようにしましょう。

みなさんは、天のおとうさまの子どもです。この世に来る前は天のおとうさまといっしょに住んでいました。このことを忘れないでください。肉体をいただいてこの世に来て、そして今はためされています。天のおとうさまはわたしたちを愛していらっしゃいます。そして主である救い主もいらっしゃいます。ですから、わたしたちはいつかまたこのおふたりのところにもどって、いっしょに住むことができます。

子どもたちを愛し、たいせつにする教会や救い主をお与えくださった神さまにかんしゃします。イエスさまは救い主です。そしてわたしたちを愛していらっしゃいます。イエスさまがみなさんを祝福してくださるようにお祈りします。



歩けるようになった足なえ

昔エルサレムに、生まれたときから歩けないひとりの男がいました。そこで人々は毎日その男を宮に運んで行き、門のところやすわらせてあげました。男は宮に入る人たちから、お金やほどこしものをもらっていたのです。

ある日、イエスさまのしもべであるペテロとヨハネが、祈るために宮に入って行きました。それを見ていた足の悪いその男は、ふたりを大声で呼びとめました。

ペテロとヨハネは立ち止まってふりかえり、その男を見て何とかかわいそうなのだろうと思いました。そこでヨハネは、「わたしたちを見なさい」と言いました。

男はお金をくれるのだろうと思って、ふたりを見上げました。

するとペテロはこうに言いました。「わたしには金も銀ありません。でもわたしにあるものをあげましょう。ナザレ人イエス・キリストの名によって、歩きなさい。」

そしてペテロはその男の右手を取って起こしてあげました。すると、たちまち40年間も動かなかった足とくるぶしが強くなって、男は立ち上がり、歩き回ったりおどったりして神さまをたたえながら宮に入って行きました。

いつも門のところやすわって物ごいをしていた足の悪い男が歩いているのを見て、人々はおどろきました。いったい何がおこったのだろう。何もわからなかった人々は、そのきせきにおどろいて、ペテロとヨハネとその男のまわりに集まってきました。

ペテロは人々を見て、言いました。「なぜおどろくのですか。なぜ、この男が歩けるようになったのは、わたしたちの力だというような目をしてわたしたちを見るのですか。この男は、あなたがたがはりつけにして殺したひとり子であるイエス・キリストを信じる信仰によって、いやされたのです。だからあなたがたも自分の罪をゆるしていただくために、悔い改めて、心を入れかえなさい。」

そこにむらがっていた五千人もの人々の多くが、ペテロを

信じました。

でも祭司や人々の長は、ペテロがイエス・キリストやその復活について話すのを聞いて腹を立て、ペテロとヨハネをろうやに入れてしまいました。

次の日、ペテロとヨハネと歩けるようになった男は、以前イエスさまをためそうとした祭司や律法学者の前に引き出されました。祭司たちは、だれの力とだれの名まえによってその男が歩けるようになったのか知りたいと思い、それを話すようにと言いました。

するとペテロは、このようにこたえました。「あなたがたがはりつけにして殺し、神によって生き返ったナザレ人イエス・キリストの名まえによって、この男があなたがたの前に立っていることを、すべての人々に知ってもらいたい。」

祭司たちはどうしたらよいかわからなくなってしまいました。そこで話し合い、ペテロとヨハネにこう言いました。

「二度とイエスのことを話したり、イエスの名まえによって教えることをしてはいけません。」

ところがペテロとヨハネは、このようにこたえたのです。「神さまに従うよりあなたがたの言うことを聞くほうが神の前で正しいかどうか、あなたがたは決めなければならない。わたしたちは見たり聞いたりしたことを話しているだけなのだから。」

祭司たちはほかにもペテロたちをおどしましたが、これといってしばっておく理由がなかったので、ふたりをゆるしました。

そんなことがあってから、ある日イエスの教えを守っていた人たちが集まっていたときに、みんなはとても聖霊にみたまされました。するとふしぎなことに、その場所がゆれ動き始めたのです。

そこで信じた多くの人々は心をひとつにし、思いをひとつにして、歩くことができなかった人を歩けるようにされた神さまをほめたたえました。（使徒行伝3、4章）

タツノオトシゴ

タツノオトシゴは、5センチから30センチくらいのものでいろいろありますが、たいていは8センチから10センチくらいの大きさです。

タツノオトシゴにはしっぽがあります。そのしっぽで自分の兄弟や、サンゴ、海草、貝がらなどにくっつくことができます。

タツノオトシゴには歯がありません。長い鼻のつけねに、びらびらした小さなべんがあって、それが開いたりびしゃりと閉じたりして、海の小さい動物や植物を食べるのです。

タツノオトシゴの色は、温度やまわりの色によって、茶色から黒になったり、うすい色になったりします。そのため海草の色とかさなって、どこにいるのかわからなくなってしまう。

タツノオトシゴの目はかわっています。まぶたがなくて、目だまはどうじに反対の方向に動かせます。目の前に食べ物を見つけて、うしろにもおいしいそうなものを見つけたら、どっちを食べようときめるのはむずかしいでしょうね。

タツノオトシゴの一生のうちには、ほかにもかかったことがあります。春から夏にかけて、メスは200個くらいのたまごをうみます。するとオスがそのたまごを、おなかの前につけているふくろにいれて、45日間くらいもっています。たまごがかえると、小さいなタツノオトシゴは、自分で泳ごうとふくろからとび出てきます。

点を結んでタツノオトシゴを見つけましょう。このタツノオトシゴは実物よりも大きめにかかれています。

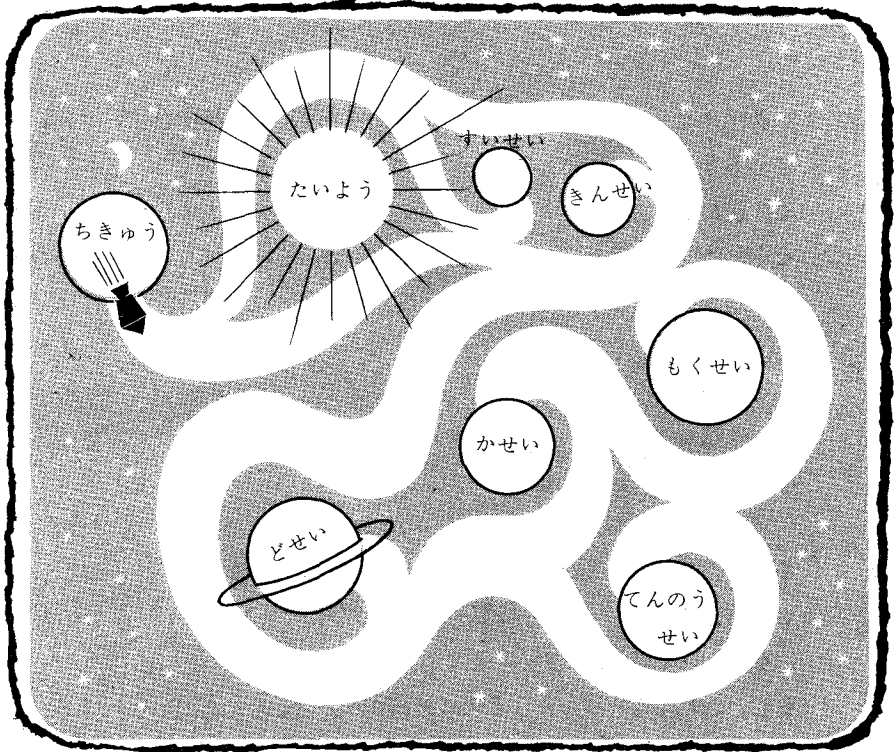




かせいへのたび

ボブ・リッドマン

ちきゅうからかせいまでいちばんちかいみちをみつけましょう。



わたしはなんでしょう

キャロル・コナー

てんのついているところぬってみましょう。



マニラの花売り

作：アグネス・M・ファーロ

絵：シェリー・トンプソン

タマヨはマニラに市のたつ日が好きでした。市場の陽気なざわめきや、ぶーんとただよういいにおい、そして明るく輝く太陽が、花かごと貝がら細工、青い海へ続く海岸に光る、そんな市場の通りが気にいっていました。だけど、きょうはあまりうれしくありません。

「おとなりのオリッドさんが病気だから、きょうは看病しなくちゃ」とおばあさんが言いました。「でも、食べ物を買うには花を売らなくちゃならない。そこでねえ、タマヨ、花を市場で売るのはおまえしかいないんだよ。」

「花なんて女の人しか売らないのに。」タマヨは心の中でそうつぶやきながら市場へ歩きました。「どうかホセに会いませんように！」

タマヨは朝早く、太陽がまだ山の上に出ないうちに出かけました。こんもり茂った木々に半分かくれている小さな湖のそばを通り抜け、丘の斜面にたなのようにつき出ているせまい道を、注意深く歩いて行きました。そこからは、魚をとる舟の白いほが小さな点になって、青い海に浮かんでいるのが見わたせました。

村に通ずるほこりっぽい野道に出ると、女の人が頭の上に大きな花かごを乗せて歩いていました。みんなタマヨを見てくすくす笑っています。

まったくいやな気持ちでした。タマヨは考えました。「こんなのはまだいいや。ココナッツや、バナナやたきぎをつんだ水牛をひいて、男の人や少年たちが市場に来たら、それこそひどいことになる。みんなぼくを見て笑いころげるだろうな。とくに、あのホセは！」

この気持ちをふりはらうかのように、頭を左右にふりながらタマヨはおばあさんがいつも店を出していたアンディノさんのとなりに、持ってきた花をおろしました。

アンディノさんは、ふしぎそうな顔でたずねました。「きょうはあんたが花を売るとかい？」

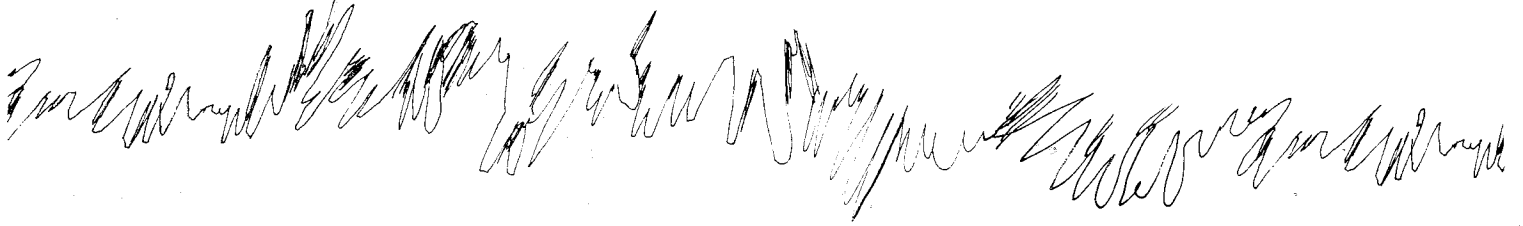
タマヨは、「おばあさんはこれないのです」と言いながら、顔が赤くなるのがわかりました。

「お花をきれいにならべるんだよ。」

「ええ、おばあさんがやるようにでしよう。」

タマヨは、ピンクと黄色のきく、美しい赤いバラ、大きな白ユリをとり出してならべました。そして、ずいぶんじょうずにできたろうと思って、うしろにさがってながめてみましたが、思っていたほどきれいではありません。でも、どうしたらもっと見ばえがするようにならべられるかわかりませんでした。いそがしくなければアンディノさんがきっと手伝っ





てくれるのと思いました。もうタマヨのすることは、お客が来て花を買ってくれるのを待つだけでした。

太陽の光が、やしの葉でふいた村の家々の屋根を照らすころ、タマヨは丸い石をしいた道の上を荷車がガラガラとなる音を耳にしました。男の人や少年がやってきたのです！
タマヨは花を売ることなどすっかりわすれて、ただみつからないようにと、すみのほうにひきさがりました。

突然、アンディノさんがさけびました。「ごらん！ ホセが来るよ。だれかとひともんちゃくおこそうとしているの

さ。」

タマヨは、心ぞうがひっくり返ったような気がしました。ホセはもういつもとちがった花売りがいるのを見つけて、にやりと笑いました。タマヨは逃げ出したいのをがまんして、やっと立っていました。もし手ぶらでにげ帰ったら、おばあさんががっかりするだろうと思ったからです。

ホセはタマヨのまん前に立ちただかると、急にきくの花をひつつかみ、めちゃめちゃにちぎって地べたに投げつけ、「雑草売りのタマヨ少女でござあい」とばかにしました。

タマヨの心にはいかりがこみあげてきました。おばあさんは、美しくて強い花を育てようと、どんなに働いたことでしょう。タマヨは、こわいこともわすれてホセに近より、大声で言いました。「やめろ！」

「どきなって、かわいいおじょうさん。」

ホセは、タマヨをどんとつきとばしました。

タマヨは、丸い石の上に頭からひっくり返ってしまいました。タマヨの耳には、ごろつきのように市場を通りすぎながらへらへら笑っているホセの声が聞こえました。

「ホセはまったく悪いやつだねえ。」 アンディノさんは、黒い目をきらっと光らせて、「まだあんたは運が良かったよ。もっとひどいめにあったかもしれなかったんだから」とつぶやきました。

タマヨは、さけたシャツを見ながら言いました。「そのと



おりだよ、もう来なければいいけど。」

夕方になり、かげぼうしが長くのびてきたかと思うと、太陽ははるか向こうの地平線にしずんでしまいました。タマヨの心はおどりました。花を全部売ってしまったのです。お金がズボンのポケットで、ジャラジャラと音をたてました。

「おばあさん、よろこぶだろうな。暗くならないうちに、いそいで家に帰らなくちゃ。」 そう思ったタマヨははっとしました。ホセがどこかで待ちおせしているかもしれない。

タマヨは、ほこりっぱい野道を歩き出しました。日中のあつさのあとのそよ風はこころよく、丘の斜面の細い道をとぼとぼと歩いてゆくタマヨのさけたシャツを、そよ風がふきぬけていきました。

湖のそばを通ろうとしたとき、タマヨは近くでだれかが呼ぶ声を聞いたように思って、ちょっと立ち止まりました。じっとして聞き耳をたてましたが、何の音もしません。「風の音か、でなкゃ鳥の声だろう。」 そう思ってしばらくすると、今度ははっきり聞こえました。

「たすけて！」

ぱっとタマヨは走り出し、枝がひくくたれている木々の間をさがしました。土手から数メートルのところ、岩にしがみついて、水の中でひどくもがいている人がいます。

「ホセだ！」 タマヨはいきをのみました。

タマヨは、いっしゅんまよいました。でも、「ホセのしたことがどうであっても、今はホセをたすけなくては いけない。」 そう決心しました。「がんばって、いまいくから。」

自分より大きい少年をたすけるのは、かんたんではありません。ホセは力もあるし、今はおそろしさでばたばたあば



ているのです。

タマヨはありったけの力をふりしぼって、少しずつ岸へ進んでいきました。ついに岸にたどり着いたとき、タマヨもホセもすっかりつかれ、さむさでふるえながらたおれてしまいました。

ようやく息をついたホセは、つぶやくように言いました。

「ほんとうにありがとう、タマヨ。」

「どうして泳いでなんかいたの、ホセ？ もうすっかり暗くなっちゃったよ」とタマヨが聞きました。

ホセは、ぬれたかみの毛を指でかきながら、「足をくじいたんだ。ほんのちょっと水の中を歩くつもりだったのに、深い穴に足をつっこんでしまったんだ」ホセはそう言って、はづかしそうにこうつけ加えました。「ぼくは泳げないんだ。運が良かったよ、君が泳げて。」

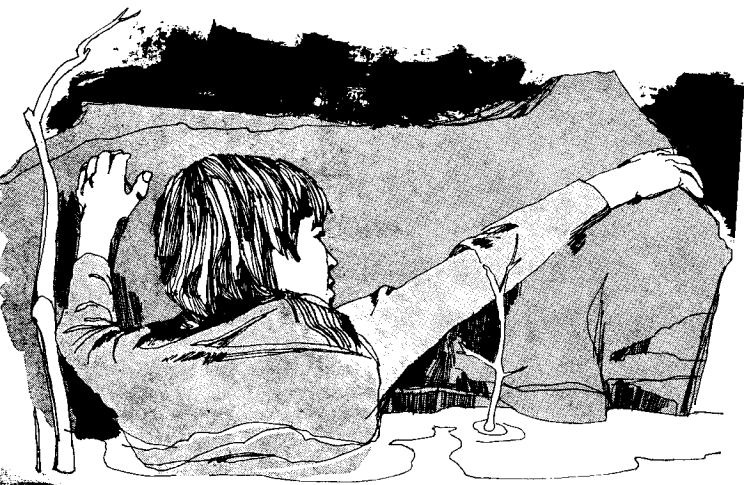
「そして、ちょうどいいときにぼくが通りかかったこともね」とタマヨも言いました。

ホセはうなだれて言いました。「ぼくは悪いことばかりしてきた。だから、ぼくをたすけるよりおぼれさせようとする人はおおぜいいる。」

「ぼくがそんなことをしたら、ぼくはもっと悪いことをすることになるって、おばあさんがおしえてくれたんだよ。」 タマヨはそう答えました。

「ぼくははずかしいよ、君をからかったりなぐりたおしたりして。君はゆうかんだ。ぼく、君の友だち、いや親友になりたいよ」とホセは言いました。

タマヨは服を着ながら、笑って言いました。「さあおいでよ、親友。ぼくの家は、ここから近いんだ。いっしょにいこう。」



予言者からの召し

リンダ・シェリー



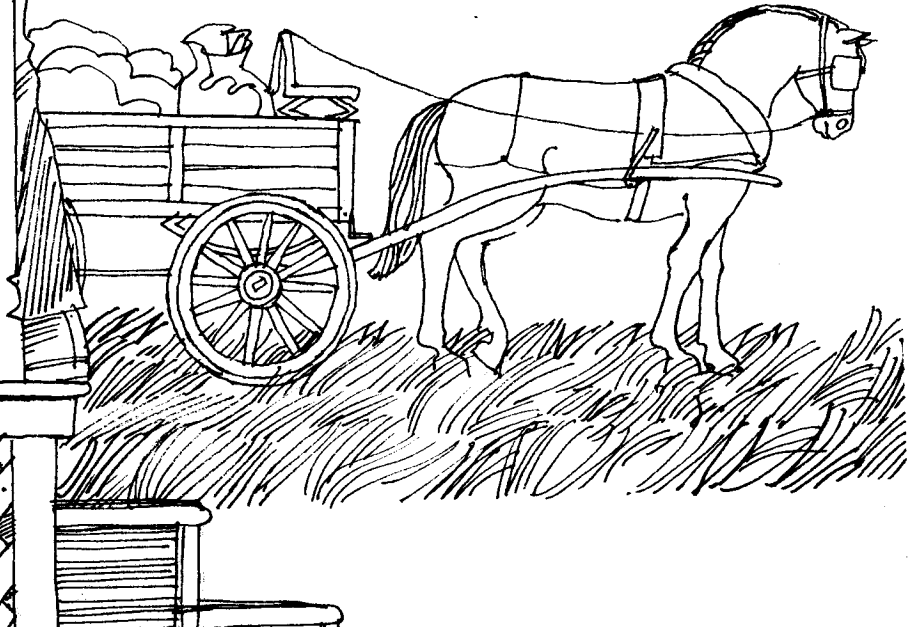
初めてのあの厳寒の冬、ジョージはけんめいに働きました。雪の中一軒一軒をまわってわずかばかり残ったさびた縫い針を売り歩きそのあとは重曹、石けん、みつろう、薬草のかみつれ、その他の家内工業製品を行商し、ようやく長年の念願だった立派な商人の地歩を築いたと思うと、あの召しが来たのでした。伝道に出るようなという予言者からの召しが。その召しは、このような栄誉を受けて大勢の兄弟たちが働いているスコットランドや太平洋諸島でもなければ、レーマン人に永遠の福音を説くという召しでも、何百人と続

々改宗者が生まれているカナダへの召しでもありませんでした。ジョージの召しというのはぼろ切れを集めることでした。彼は町の笑い草になりました。ほとんどすべての人が彼の召しについてあれこれ言い、信心深い人でさえ彼の召しを「最低の召しだ」と言いました。ジョージ・ゴダード自身が書いています。

「(この召しに)生来のプライドはしたたか打ちのめされた。……長年世間に商人、競売人として知られてきたあげくに……町の家々を片手にかご、片手に袋をさげてぼろ切れを請うて回る姿をさらすとは。ああ、何という変わりようか。……ヤング大管長から最初に申し出があったとき、その屈辱的な仕事に私はただあっけにとられた。」

そのような面目を失わせる召しであっても、それは召しであるので、大管長に対する彼の応えは、彼の人生と改宗を如実に物語るものでした。

それより30年前、ジョージは英国のレスター市に住む著名な商人でした。しかしジョージとエリザベスと8人の子供から成るゴダード家の生活は、教会に加入してから全く変わりました。ジョージは新しい信仰に情熱を



燃やして、毎週水曜日の夜は市場に店台を置くと、他の商人のように商売を始めずに福音を宣傳伝えたのでした。そのためなじみの客は離れて行き、改宗後8カ月で破産してしまい、店は債権者の手に渡りました。

生活の望みが失せたかのように見えました。ところが、ジョージの兄弟のひとりが「モルモン教」の説教が一族に及ぼした不名誉にろうばいして、彼に言わせれば「ばか者と凝固固まった奴が水いらずの平和にふける土地、モルモンがキンボウゲのように栄える土地」アメリカにジョージの家族を送ろうと申し出て、まもなく生活は落ち着きました。

こうして1851年10月、ジョージと妻と8人の子供は、エセックス号でアメリカに船出しました。しかしすべてが順調ではありませんでした。シオンへの困難な旅には犠牲者が出ました。特に子供たちの中に、ジョージの家族も例外ではありませんでした。ひとり航海中に死に、ひとりメンフィスで、ひとり真冬にセントルイスで、ふたりは平原でコレラにかかって死に、12カ月の短い旅の間にこれらの死者を出して、ともかくもシオンに到着しました。

いくら真の福音があるといっても、ジョージは働かなければなりません。時は9月で、冬はどんどん近づいています。商売は英国の異邦人相手では良いもうけになっても、聖徒たちを相手にはできないと、ジョージは思いました。それで彼はほかの仕事を捜しました。あちこちと職を求めて歩きまわり、公共事業の石運びまでしていましたが、何をしても生活をうるおすまでは行きませんでした。しかしそう

こうしているうちに、ソルトレークの店々に縫い針が不足していることを知りました。幸いなことに、たまたま彼が英国から持ってきた小間物の大半はその縫い針でした。彼は市場を見てまわり、セントルイスで手に入れた古いタバコ入れを出して品物を並べ、再び商いを始めました。縫い針が売り切れると、ジョージは、聖徒たちが家内工業で作った自家製のインクや石けんやマッチを売り始めました。勤勉な彼は年がたつうちに段々と世間で名を知られるようになり、1861年には多くの人からソルトレーク盆地で5本の指に入る商人と認められるようになりました。

予言者から、その商売はやめてぼろ切れを集めるように頼まれたのは、彼の商売が再び頂点に達した1861年のことでした。その申し出を受けた当初、彼は屈辱を覚えました。しかしそれは初めだけのこと。彼はあとでこう書いています。

「しかし少し考えてみると、自分が祖国イギリスをあとにこの山狭の盆地へやって来たのは、自分の時間や財産をまかせて、天父のみ旨を行なうためだということを思い出した。」

ジョージ・ゴダードはその召しを受けました。

商人気質のジョージは、ぼろ切れ収集の最も効果的な方法を考案しました。町の端から始めて東から西へ1軒残らずあたり、平均して5軒に1軒の割合でぼろを集めることができました。彼は3年間それを続けて、ソルトレークの各戸を3回まわり、スプリングヒル、プロボ、アメリカンフォーク、リーハイ、ウィロウクリーク、ビッグコットンウッド、オグデン、ケイスウオード、ファーマントン、センタービ

ル、セッションズセツルメント、サンペテ、さらにアイダホの多くの町々の家を訪れました。彼を一度知ると、ぼろ収集人としての彼のイメージは向上しました。監督に、ワード部の壇上から、困難期にあるユタの紙工業にぼろ切れがどれほど必要かという「ぼろ切れ説教」までさせるほどでした。ジョージはぼろ切れと交換に品物をあげることを考えつき、召しが終わるまでには交換品目が相当多くなって、めのうのボタンから桃のエキスまであらゆる物にわたりました。

ジョージはそのような品物と交換にぼろを集めながら、主婦たちから実にいろいろなぐちも一緒に集めたものでした。

また、彼のつとめにはほかにもおもしろいことがありました。母親が子供を「黙らなければぼろ屋さんにあげてしまうから」と言って叱るのを聞いて笑ったものでした。それはひどい言い方のように思えるが、必ずききめがあったと彼は書いています。

やがて3年間の召しは終わりました。彼はその召しを立派に果たしました。召しを受けたとき、ジョージはぼろ切れ収集の召しは世間での自分の地位を下げるものだと考えていました。でもそれは間違いでした。その召しによって彼はモルモン社会の全員と知己になり、召しを終えたときには以前にも増して商人、指導者として尊敬されました。

現在、予言者の塾の書記、ソルトレーク日曜学校管理会長としての彼についてほとんど記録はありません。歴史にはただ、ジョージ・ゴダードはぼろ切れ集めの召しを予言者から受け、それに従ったとだけ誌されています。

私の改宗

七十人最高評議員会会員

ハートマン・レクター・ジュニア



幼年時代、父は私の優れた模範であった。私の知合いのだれにも劣らず正直で、名誉を重んじる人だった。隣人とのつきあいにおいて完全と言えるほどに。父は10セントの借金を返しに、10マイルを歩いて行く人だと確信している。彼がはいと言えば証文は必要なかった。父はこれこそ当然の生き方であると感じていた。しかし子供であった私は、外に見えるしるしを望んだ。私は戸惑った。父がもし信心深いならどうして教会に行かないのだろう。神が必要なら、どうして祈っている姿を見たことがないのだろう。また、私は時々父の行動に矛盾を感じた。例えば私がタバコを吸っているのを見つけてひどくぶつかったことがあったが、それをするのに自分は今まで吸っていたパイ

プをわきに置いてからというような状態だった。

私には、海軍に入隊するまで、毎週教会に行く習慣はなかった。しかし海軍では、飛行準備訓練を受けている間毎日曜日の夕方、行進しながら礼拝に通ったものであった。以来毎週出席するようになったのである。また私は、宗教書を何冊も読み、そのことについてよく考えた。

このときも、我が家で感じたと同じ矛盾を随所に感じたようである。それは言うことと行なうことの相違である。私は、自分で教義を研究した幾つかの教会の中にもそれを感じた。というのは、それらの教会の教理が聖典と一致しないことが何回もあったからである。私には多くの疑問が未解決のまま残された。

あるとき牧師が私に、「納得がいかないなら、とにかくただ信じなさい」と言った。「信仰はあなたに何も要求しません。信仰があれば神様がすべてをして下さいます。ただ信仰を持ちなさい。」私はどうしてもそれが正しいと思えなかった。

ミズーリ州のセントルイス駅の構内を歩いていたとき、軍人用売店で牧師に会った。彼は話のできる小集会室へ私を誘った。そしてどこか教会に属しているかと聞いたので、属していないと答えた。彼は話をしてくれた。軍隊生活の間に、必ず良くない仲間とつきあうだろう。言い寄って来る女性もいて、友だちはこんなうまい話を利用しないのは馬鹿だとさかんに言うだろう。しかし純潔を守ることは馬鹿げたことではない。それは非常に賢明なこ

とである。イエス・キリストの生活は弱者の無感覚な生き方だと考える人が多いが、彼らの意見に左右されてはならない。また、清い生活はとても大事なことで、いつか結婚するときには花嫁に期待するのと同じように、あなたも道徳的に清くなければならない。清い生活をするのはむずかしいかもしれないが、努力するだけの十分な価値がある。例えば、軍の有無を言わずに事態に即応するだけの力と勇気がもっと湧くだろう。さらに彼は、このことについては今すぐ、冷静に考えられるうちに決心するのが一番だとも言った。

その出会いは非常に印象的であった。彼の言ったことは本当だとわかったが、彼の言葉通りにしようとそのとき決意したとは、われながら気づかな



THE LIFE AND COVENANTS

PEARL HARBOR AT PRICK



かった。その後私は道徳的な危険に何
回も遭遇したが、まるでだれかに守ら
れているかのように、どうにか害を受
けずに来ることができた。

学び、祈るごとに、またこの教会あ

の教会と行ってみるごとに、真理を知
りたいという望みは強くなったが、ど
こへ行っても何かが欠けていた。

1947年、私は海軍の戦地勤務を解か
れ、ミズーリ州のわが家に帰った。そ

して、以前に知合い、4年ほど交際をしたことのある小柄な黒っぽい髪をした美しい女性と結婚した。私は初めて彼女に会ったときのことをよく覚えている。彼女は通りを向こうからやって来た。私が18歳、彼女が14歳で、私はすぐにこの人こそ自分にふさわしい人だと感じた。その日私は彼女に話しかけ、知合いになった。その後私は、海軍に入るのであと4年あるが、帰って来たら結婚したいと告げた。

そうして4年が経ち、私は約束通りに家へ帰って愛する恋人に求婚し、5カ月後に結婚した。結婚すると、私たちは一緒に聖書を読み、話し合った。子供がふたり生まれてから、私は朝鮮戦争の海軍飛行士に召還された。カリフォルニア州のサンジェゴ駐屯の艦隊に配属され、その後13週間の特別訓練を受けるために、小さな家族をサンジェゴに残したままハワイへ送られた。

私が出かけ、妻が家財を借家に運び込んだのと前後して、モルモンの宣教師が通りがかり、ドアをノックした。彼らはチラシを配っていて、話し合う多くの質問は私たちがふたりで考えあぐねていた質問だったので、妻は非常に関心を覚えた。

妻は私への手紙に、ふたりの青年が家を訪れ、宗教について多くの質問をした、彼らは全部の答えを持っているようだと書いてきた。それを読んだ私はいささか憤慨した。教会のことだとはいえ、私のいない留守にふたりの青年が妻を訪問しているとは、私は氣にくわなかった。特に、自分が一生をかけて考えてきた質問に答えているということが。

私がハワイから帰ったその夜、妻のコニーは私にジョセフ・スミスのお話をした。妻がジョセフ・スミスは示現や啓示を受けたと話したとき、あまりにばかげていると思えたので私は彼女の顔をのぞき込んでケラケラ笑った。すると妻は泣き出した。私はそのことから、ジョセフ・スミスの話が妻にとってどんなに大事なのかを悟り、心を和らげて言った。「じゃ、ともかく彼らが君のために置いていった物を少しでも読んでみるよ。」

モルモン經を読み出すや、私はそれまで求めていたものがついに見つかったことを知った。

私はニーファイ第一書を読みながら心にこう思ったのを覚えている。「愛する神様、これが真実でありますように。どうか、これが探し求めていた真理でありますように。……なぜならそれが真実であれば、私が生涯をかけて尋ね求めていたすべての質問が答えられるからです。」私はニーファイ第二書を読み終えるまでに、それが真実であることを知った。

何年も前から、私は主にひとつの祈りを捧げていた。「愛する神様、どうぞ私に真理を示して下さい。どうぞ私を真理に導いて下さい」と。私はいろいろな場所で真理を捜してきた。そしてあのとき、ふたりの青年がその真理を私の住んでいる家に伝えに来てくれたのであった。彼らは非常に若いにもかかわらず、大きな力を持っていた。それは真理と神であった。私は彼らの教えに逆らうことができず、また逆らおうとも思わなかった。

私が教会に出席したのは、朝鮮へ発

つ前のわずか数週間であった。1951年の大晦日に航海についたとき、私はモルモン經、教義と聖約、高価なる真珠の合本とジェームズ・E・タルメージの「信仰箇条の研究」を持って行った。私は洋上の1カ月間、「信仰箇条の研究」を読んだ。そして2月のある晩、船内の拡声器から、末日聖徒の礼拝が7時半から乗組員図書館で行なわれるという発表が流れた。その時刻に図書館へ行くと、サンジェゴでわが家をノックしたふたりの若い宣教師と非常によく似た様子の青年が4人いた。私は彼らに、まだ教会員ではないが勉強したいと話した。彼らはとても心よく私を歓迎してくれた。

1952年2月下旬に日本に着いたとき彼らは私のバプテスマの準備が整ったと判断した。それで私は一緒に日本伝道本部に行き、そこで面接を受け、推薦状を受け取った。1952年2月25日、私は摂氏零度の寒さの中、ミズーリ州のわが家から7千マイルも離れた日本伝道本部裏手の庭でバプテスマを受けた。そのあと、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に確認された。妻はその4日後にカリフォルニア州サンジェゴでバプテスマを受けた。こうして私たちの探求は終りを告げた。

依然として、主は次の言葉を成就してくださる。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見い出し、門をたたく者はあけてもらえるからである。」(マタイ7:7, 8)

同胞に証を述べる義務

ユダヤの平原で

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

ペテロは言った、「語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語る」べきである(Ⅰペテロ4:11)。これは聖霊の力によって導かれなければならないという意味であり、私が今一番望んでいるのは、正にこのことである。

私は自分が話すことについて、主に相談した。話すに適切であると思ったことを主に提案したのである。もちろん、主の同意が得られるものと仮定してである。そしてその同意を得ることができた。従って、もし今私が語る賜物を与えられ、あなたがたが、聞きとる耳を持たれるなら、ここに霊とまことをもって主を礼拝しようとしている私たちは、一同そろって啓発されることであろう。

「ユダヤの平原で」と題する私の詩を引用して、話を始めようと思う。

われユダヤの平原に立ちぬ。

わが耳にささやく天界のざわめきと調べ。

また、

罪の汚れを知らぬ天使がダビデの末の誕生を告げし声。

羊を守る羊飼いの上に、
輝ける栄光の光くだれり。



天の円蓋より聖歌隊の、神の御子が肉の体を得るのを見守るうちに。

明き声は歌う、

「高き神、栄えあれ

地には平和を、人に親しみ

今ぞ御子は生まれける。」

心に響くは固き証、

「清き至高者、神の子イエス、

地上にきたれり、わが魂救わんと

罪と死と墓よりわが身を救わんと。」

さて、救いはキリストのうちにある。キリストは私たちの救い主であり、贖い主である。また、アダムの墮落によって世にもたらされた肉体の死と霊の死を贖うためにこの世に来られた。そして、救いの計画を私たちに与えられ

た。これこそイエス・キリストの福音と呼ばれるものである。この救いの計画とはこうである。すべての人がキリストを信じる信仰を持ち、各自罪を悔い改める。次に、バプテスマの水に入って、戒めを守り、心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして神に仕えるという誓約を交わす。そして聖霊の賜物と臨在を受け、以後毎日正しい、献身の日々を過ごすことである。そうすれば、この世で平和を得、来たるべき世では永遠の栄光を授けられると約束されている。

さて、私たちは主を代表する者である。主は私たちに、永遠の福音を完全な形で与えられた。天は、私たちの時代に開かれた。神の御声が再び聞こえたのである。そして御使いが主のもとからつかわれ、諸々の鍵と権能、権威、神権が再び人に与えられた。再びすべての律法と特権を与えられた私たちは、人を救い、昇栄させるのに必要なあらゆる力を所有している。すなわちこの王国に、この教会に神の王国の鍵、全地の人類を救う鍵を持っているのである。

主が私たちに委任されたことがある。それは、同様の権能を持っていた古代の人々に委任されたと同じことで

ある。すなわち、主の言葉を全世界に伝え全地にいる主の子らに救いをもたらすということである。そこで私たちは、この何ものにも比べることのできない、非常に重要な任務を、どのように果たしていけばよいかを知らなければならぬ。救いの真理を同胞の間で宣言し、回復のメッセージを世界に携えていくには、どうすればよいだろう

か。

このことについては、永遠の原則がある。私たちが今日することは、原則において、過去のあらゆる時代に、予言者や義人たちがしたことと同じである。同じであるばかりでなく、厳密に昔の人々の行動そのものである。

この神権時代の初期に、主は言われた。「…当教会の長老、祭司および教

私たちは
全地の人類を救う鍵を
持っているのである。

師たちは、聖書と完全なる福音を載せたるモルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし」（教義と聖約42：12）と。また、「民に証し民を警め」（教義と聖約88：81）るためにあなたがたを遣わした、とも言われた。

このふたつの務め、すなわち、福音の教義を教えることと、私たちが宣言している事柄は真実であるという個人的な証を述べることを例証して余りあるのが、モーサヤの息子たちの伝道の話である。記録によると、「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。そればかりでなく、かれらは非常に熱心に祈りと断食とをしたから『予言のみたま』と『啓示のみたま』を受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。」（アルマ17：2、3）

上記の務めを果たすには、ふたつの前提がある。まず私たちは、教会の教義を知るように求められている。これは義務である。永遠の生命の言葉を貯えなければならない。可能な限り、知的に思考しなければならない。私たちは与えられた才能と能力の限りを尽くして、救いのメッセージを宣言しなければならない。私たちのメッセージを自分にとっても、天父の他の子らにとっても理解し得るものにすることが求められている。しかし、それをした後で、そしてまたその過程においても、私たちには証をする義務がある。言い換えれば、聖霊が与える啓示によって私たちが説く御業と教義が真実であり神のものであることを、世の人々にも教会の兄弟姉妹にも知らせることであ



る。

ここで証がどのように述べられたか昔の例を引用したい。私たちが今日の時代に対して負っているのと同じように、ペテロとその同僚は、当時、救いのメッセージを全地に宣べ伝える義務を負っていた。恐らくペテロは、イザヤや他の予言者が、キリストとその福音について記した啓示を読んでいて、人々に教えたものと思われる。ペテロは、人々とそのことについて論じた。彼は、「さあ、われわれは互に論じよう」（イザヤ1：18）という神の勧めに、また、「なんじらの道理ことわりをとり出せ」（文語訳イザヤ41：21）という神の命令に従ったのであった。

しかし、彼はそれだけにとどまっていなかった。教義を教えた後、論じた後に、自分が同胞に伝えていることが真実であり、神聖なものであることを証した。また主は、霊的な経験をさせ、聖霊の力を宿らせることによってペテロを備えられた。

例えば、次のことを覚えておられるだろう。ペテロと他の十二使徒と、聖徒たちの小さな群が、二階の部屋に集まっていたときのことを。そのとき、主イエスが現われ、そこに集まっていた人々は、恐れ驚いた。すると主は彼らに言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ。」（ルカ24：38, 39）そこで彼らは手を伸ばして、イエスの体にあるきずあとに触れた。イエスは食物を求め、みんなの前で食べられた。

トマスはこのときその場にいなかった。

それで仲間の使徒が述べる証を信じなかった。8日後、主は、今度は全員そろっている所へ、同じように姿を現わされ、トマスに言われた。「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスは言った。「わが主よ、わが神よ。」（ヨハネ20：24—28参照）

これはすべて、イエスが墓から触知し得る体をもって出て来られたことを示すために、なされたのであった。ペテロと同僚たちに、イエスが神の子であることを示す主の方法だったのである。もし死人の中からよみがえられたのであれば、イエスは神の子であった。もしイエスが神の子であるなら、彼らが宣べ伝えている救いの福音は真実であった。そこで彼らは、人々の心に、イエスが死からよみがえったことを信じさせるといふ義務を負うことになった。さて、彼らはイザヤの言葉を引用し、啓示をもとに論じて、信じさせようとしたに違いなかった。事実そうした。しかし、それが終わると、個人的な証をした。ここでペテロが述べたそのような証の例を読んでみよう。ペテロは集まっていた一群の異邦人にこう語りかけた。

「あなたがたは、神がすべての者の主なるイエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝えて、イスラエルの子らにお送り下さった御言をご存じでしょう。

それは、ヨハネがバプテスマを説いた後、ガリラヤから始まってユダヤ全土にひろまった福音を述べたものです。

神はナザレのイエスに聖霊と力とを

注がれました。このイエスは、神が共におられるので、よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしながら、巡回されました。

わたしたちは、イエスがこうしてユダヤ人の地やエルサレムでなさったすべてのことの証人であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。

しかし神はイエスを三日目によみがえらせ、全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現われるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。

それから、イエスご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであることを、人々に宣べ伝え、またあかしするようにと、神はわたしたちにお命じになったのです。」（使徒10：36—42）

そしてこの後にすべてを包括するような、含蓄のある言葉が続いている。

「預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしています。」（使徒10：43）

ペテロが述べている証をもうひとつ読ませていただきたい。

「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである。

イエスは父なる神からほまれと栄光とをお受けになったが、その時、おごりかたの栄光の中から次のようなみ声が

かかったのである、『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』。

わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いたのである。」(Ⅱペテロ1:16-18)

私たちに課せられている数々の義務すなわち福音の学者となるべき義務、啓示に精通する義務、論じ合ったり分析したりする方法を身につける義務、あるいは私たちが身につけている力と才能の限りを尽くして、救いのメッセージを私たちの間ではもちろん、この世に向けて宣べる義務、私はこれらを決して過小評価するものではない。しかし上記のことだけでは、十分ではないのである。すべてを尽くした後で、主が今日の私たちに与えられた戒めに従わなければならない。『「……あなたがたはわが証人である』と主は言われる。」(イザヤ43:12) 私たちは自分が教える教義に、神聖な承認の証印を押さなければならない。この証印は、証の証印であり、聖霊が個々に与える知識である。

さてペテロは、長々と論じることができたであろう。しかし、そうしていたら、人々はペテロと議論して、次のように言ったかも知れない。「あなたは聖書がわかっていない。あなたの解釈は間違っている。ここが、またあそこが誤っている。」しかし、人は証と議論することはできない。従ってペテロが論じた後で、多くの場合にしように、およそ次のように言っていればどうであろうか。「私はある二階の部屋にいた。すると主が壁を通り抜けて入って来られた。私たちの前に姿を現わされたのだ。私はイエスであることをはっきり見分ることができた。それ

は3年半共に働き、旅をした同じ方であった。カペナウムで私の家に泊まった方であった。私はまたイエスの手足にある傷あとにさわった。脇にも手をさし入れてみた。またみんなの前で飲食されるのを私もこの目で見た。私はイエスが神の御子であることを知っている。神の聖いみたまが、私にこの証を与えて下さったからである。」もしペテロがこのように言っていれば、議論の余地は全く残されていなかっただろう。上記のような発言に対して、議論をふっかけることはできない。フェストがパウロに言ったように、「おまえは気が狂っている。博学が、おまえを狂わせている」(使徒26:24)と行うことができるかも知れない。しかし最終的には、述べられた証を受け入れるか、拒否するかしかできない。真実であるか虚偽であるかのいずれかなのである。中間はない。

あなたは天父と御子がジョセフ・スミスに現われたことをどのように証明し、説明するだろうか。天使が今の時代に来られたこと、福音が回復されたこと、さらに私たちが世界に伝えていくことが真実であるということはどうだろうか。そう、あなたは啓示を引いて論じることができる。あなたには十分な言い分があるだろう。それは全く問題ではない。真理は私たちと共にあり、私たちが受けている教えの源は、主だからである。しかし、あなたは論じて、分析したあとは、自分が言っていることをわきまえた証人として、立たなければならない。あなたがたは、モーサヤの息子たちがしたことをしなければならぬ。予言のみたまと啓示のみたまによって語り、教えるのである。そうすれば、権威ある者のように

語ることができる。これは、私たちを世から区別する、すばらしい事柄である。私たちにこのことが知らされていることを、神に感謝しよう。私たちはこの啓示を受けているので、権威ある者のように語る立場にある。

そこで、私もこの知識を持った多数の末日のイスラエルのひとりであるので、この席で力を尽くして、そのように語ろうと努めている。私は今教えているこの業と教えが真実であり、神のものであることを知っている。

私は、「ユダヤの平原で」という詩で話を始めた。そこで、「二階の部屋で」という詩で閉じよう。

われら心痛の思いにて卓につけり、
不義なる人々われらが主を殺せし故に。
われらは主を見ぬ、十字架の上に。
御体はヨセフの墓の中に。

主、再び立たれぬ、われらが卓の傍らに。

主は生きてまします、変わらず生きてまします。

食物をとられる主、

われらは見ぬ触れぬ、足もとに畏れひざまずきながら。

主、静かにトマスに命じたもう。

「わが手に触れよ。この手こそわれ十字架にかかり、己れと汝らのために死せしその手なり。」

主、おごそかにわれに命じたもう。

「わが体に触れよ。こは骨肉の体なり。」

わが魂は叫びぬ、「主のつえの下に伏し拝め、
イエスは救い主、主、神なるぞ。」

キリストのようになることは、私たちの指標であり、目標である

「汝らはわれと同じ 人物ならざるべからず」

十二使徒評議会補助
マリオン・D・ハックス

今日の私の目的は、特に助けを必要としている人々、および主から任務を受け、彼らを助けることを主に誓約した人々に対して、証を述べることである。

キリストは西半球の民に福音を教えた時に、「…汝らはいかなる人物にてあるべきか」と尋ね、「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」と言われた。（Ⅲ ニーファイ27：27）

私たちはクリスチャンとして、この教えを自分の指標、目標として敬虔に受け入れるものである。

私たちはキリストが御父を愛しておられることを知っている。キリストは御自分の果たす役割と払うべき代価を知りつつ、御父の御心を行なうために世に來られた。

キリストは私たちを愛し、私たちのためにあらゆる毛穴から血を流すほどに深く激しい苦痛を受け、この世の使命を成就された。その血をもって私たちを贖い、私たちに不死不滅の賜物をくださり、今も永世にもわたって良きもの、好ましいものをすべて備えられた。

キリストは慈悲深いが憶病ではなかった。主に従った多くの者はのちに離れ去ったが、主は民に、父なる生ける神に関する真理を教え、御自身につい



て、またその贖いの使命について証された。主は悔改めを叫び、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受け、すべての人にこのようにせよ、と教え、従順、忠実な人々に聖霊の祝福を約束された。

キリストは人の価値を知っておられる。主はイザヤが予言したように、またナザレの会堂で自ら宣言された目的でこの世へ來られたのである。すなわち、「…貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、……囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、……」るためである。（ルカ4：18）

キリストは、さまよい出た羊やなくした銀貨や迷った息子のたとえ話を教え、責められていたザアカイと食事をし、「あなたも行って同じようにしな

さい」と、卑しいサマリヤ人の慈悲深い行ないを見習うように勧められた。また独善的なパリサイ人と反対に「目を天にむけようとししないで、胸を打ちながら『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』』」と言う謙遜な取税人をほめ、罪を悔い改めた婦人を群衆からかばわれた。

キリストは隣り人と固い絆で結ばれており、力あるたとえ話のひとつでは最も小さい兄弟に与えるパンはわたしに与えるものである、親切も愛の行ないも慈悲も奉仕も同様であると教えられた。最も小さい兄弟のひとりへの助けを拒むことはわたしを拒むことである、と言われた。

主の教えは、愛する人を失って嘆く者への希望と、約束と平安の教えである。「このように、あなたがたにも今は不安がある。しかし、わたしは再びあなたがたと会うであろう。そして、あなたがたの心は喜びに満たされるであろう。その喜びをあなたがたから取り去る者はいない。」（ヨハネ16：22）

孤独な者、希望を失った者、恐れを抱く者に主の約束が及ぶ。「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない」と。（ヘブル13：5）

キリストは理解して下さる。「そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ

深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなうために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。」

(ヘブル2:17, 18)「この大祭司はわたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについてわたしたちと同じように試練に会われたのである。」(ヘブル4:15)

キリストは不従順な者たちのために御父に祈り、涙を流された。

幼な児たちを呼び、祝福して、涙を流された。

キリストは私たちに祈れと教えられた。

主はこのようなことやさらに多くのことを、教え、実践された。それらはキリストの人となりを示している。

もちろん、主はそれ以上の御方である。聖なる贖い主、全人類の救い主、霊における長子、肉における独り子、平和の君であった。主は「……世に來りたもうて世のため十字架に付けられ、世の罪を負い、世を聖くし、あらゆる不義を潔めたもう。これ……あらゆるものを彼によりて救わんためなり。」

(教義と聖約76:41, 42)

私たちが自分では決してできなかったことを私たちのためにして下さったこと、愛や奉仕や犠牲や神の国を第一に求めるという模範を示して下さったことは、私たちのしるべであり、道である。

キリストは私たちに何を期待しておられるだろうか。

主に召され、神権を託され、主の代理人となり、主の使いをする私たちは忠実に主を代表し、御父の御心を行な



「主に従い、主と同じような人物になる人たちは、主がされたように、罪に苦しみ罪を悲しんで悔い改めた人を励まし、愛を赦しをもって祝福するであろう。」

うという誓約のもとにある。

私たちのまわりには機会がたくさんある。

先日聞いたことだが、ペットを無くした子供が泣きながら、心配している母親の所にやってきた。母親はその男の子に、いっしょうけんめい捜したけれどみつからなかったとやさしく言っていた。彼女が「お母さんにほかに何ができるかしら」と聞くと、その子は「ぼくといっしょに泣いて」と言った。

「互に重荷を負い合いなさい。そうすれば、あなたがたはキリストの律法を全うするであろう。」(ガラテヤ6:2)

不運を背負った子供たちと接する仕事をしている私の親友が、最近、17人

の里親の間を転々としてきた9歳の少女のことを話してくれた。彼女には自分といっしょになって泣いたり、笑ったり、教えたり、愛したりしてくれる人が必要である。

理解されていない人、あるいは理解されていないと感じる人は非常に大勢いる。先日私たち家族は、愛する友人のルーズ・レイク姉妹を訪問した。彼女は25年以上も車椅子の上から、人々に親切と愛を施してきた方である。

おそらく12歳の息子を同伴したからであろうが、レイク姉妹は御自分の働いているニューヨークのリハビリテーション・センターで知り合った12歳の少年について話してくれた。少年は盲目で、12年間のほとんどを悲しい状態で生きてきて、自分は教育を受けられず学ぶこともできないと考えていた。そのとき、ありがたいことには彼にチャンスが訪れ、すばらしい霊と立派な精神が彼の中に発見されたのである。少年が友に話したところによれば、彼はキャンピーに会うときまで、生まれてからずっと、盲目を人間最大の不幸と考えてきたのである。キャンピーとは有名なスポーツ選手のロイ・キャンパネラのことで、仕事に油の乗った時期に交通事故に遭い、体が不随になってしまった人である。盲目の少年は、キャンピーに会ってから、彼の方が目が見えないよりもっと不幸だと思ったという。「でもそれよりもまだ悪いことがあるよ」と言って、彼は通り過ぎる人たちの足音を頼りに病院のホールを歩きながら、自分の気持を話した。

「盲やかたわだということよりも悪いことがあるよ。それはみんなから理解されないということだよ。」少年は言った。「みんなは、ぼくが盲だから聞くことも話すこともできないって思っ

ているんだと思うよ。」

常に理解して下さる御方がいらっしゃる。そのような人物になろうとする人々は、理解しようと努めなくてはならない。神を愛し、愛する御子の友情を身に受けるとき、私たちは決してひとりきりではない。

14人の子を持つある母親が、お気に入りの子供はいるかと聞かれた。彼女は「そうですねえ」と言ってこう話した。「いるとすれば、病氣中の子供や外出中の子供です。」それは主も同じではなからうか。

南ベトナムのダナンで軍人と集会を持ったあと、私たちは、その日死線を危うく免れてまだ体が震えている上級飛行士と話をした。彼は私に頼むことがあり、遠慮がちにはにかんだ様子で打ち明けた。「ハックス兄弟、お宅に帰られてから、ほんの少し時間を取っていただけますでしょうか。電話か手紙で12歳の息子に、私が無事で、息子のことを考えていると知らせていただきたいのです。息子は先週の日曜日、私の留守中に、執事に聖任されたんです。私がどんなに息子を愛しているか知らせたいのです。」

自分に一番近い間柄の人も、愛を必要としている。

良心が納得できるように振舞わなかったために、悲しんだり苦しんだりする人が大勢いる。その人たちに、主は古代、近代の予言者の口を通して語っておられる。ヤコブが兄弟たちに語った言葉を思い出してみなさい。「さて、私の愛する兄弟たちよ、私たちの憐み深い神は、これらの事について大そう偉大な知識を与えたもうたから、私たちは神を心に思い起こして、私たちの罪を捨てようではないか。また私たちは神に捨てられたのではないから、頭

を垂れて恥じないようにしようではないか。……」(Ⅱニーフエイ10:20)

偉大な予言者モルモンが息子モロナイに宛てて書いた最後の手紙に、民の悪事を嘆く言葉が、「道を守らず慈悲の心のない」と記されている。愛する息子に対するモルモンの最後の証にはこの驚くべき訓戒と、私たちの全員が感じるべきキリストの賜物の影響のことが言われている。「さて私の子よ。キリストに忠誠であれ。願わくは、私が書いたことのためにお前が悲しみのあまり死ぬようなことがなくキリストがお前を慰め励ましたもうように、またキリストの苦しみとその死と、私たちの先祖にその御姿を現わしたもうたことと、その憐みとその忍耐と、その栄光と、永遠の生命を授かる希望とはお前がいつまでも記憶に留めておくように。」(モロナイ9:25)

私たちの生活にとって、キリストは不完全だからといって私たちを悲しみのあまり死なせてしまうような存在ではない。私たちはキリストを通し、キリストの賜物とその憐みと忍耐を受け入れて高められるであろう。これらの祝福を、私たちは常に心に留めるようにすべきである。「人はどうしてもまだ仕えたこともなく、見も知らず思いもかけない、主人を知ることができようか。」(モーサヤ5:13)

主に従い、主と同じような人物になる人たちは、主がされたように、罪に苦しみ罪を悲しんで悔い改めた人を励まし、愛と赦しをもって祝福するであろう。

正直な人ならば、だれでも自分の弱さや資格のなさを感じ、無知や高慢が頭をもたげるのに苦しむことがあるであろう。あらゆる災いにも動じない信仰を持った、善良で神のような人間、

ヨブでさえ、神にまみえた時にこう言った。「わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを。わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目で、あなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います。」(ヨブ42:2, 5, 6)

しかしキリストは、私たちがキリストのなされたようにするとき、キリストと同じ人物になるよう励まし助けて下さるであろう。父なる神を愛し、御父に私たちの生涯を捧げ、互いに愛しあい、全人類を愛し、御言葉を守り、教え、人の価値を信じ、熱心な生活を示し、悲しむ人と共に悲しみ、彼らに希望をもたせ、泣く人を理解し慰め、主に呼びかけなさい。

「声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。私の愛する同胞よ。これで満足だと思っではいけない。たとえこれらのことをみな行っても、もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり、病んでいる者、あるいは悩んでいる者を見舞わず、持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば、あなたたちの祈りは空しくなってその効果はなくまたあなたたちは神の言葉を否定する偽善者になるであろう。」(アルマ34:27, 28)

私たちが天を仰ぎ、周囲に目をやりひざまずくよう、またふさわしくなりキリストと同じ人物となるよう神が祝福したもうことを、イエス・キリストの御名によりお祈り申し上げる。アーメン。

聖典を通して啓示された福音こそ、決定を下す上で基いとしなければならないものである

人の自由意志

十二使徒評議員会補助

ジョン・H・バンデンバーク

所は北部ニューヨーク、寒い日曜日の朝だった。気温は氷点下を指し、道路は凍てつき、その両端には吹き寄せた雪が深く積もっていた。その朝教会に來たのは、牧師と10丁ばかり離れた所に住んでいる足の悪い89歳の老婦人だけだった。

彼女を見て驚いた牧師は、彼女の名を呼んでこう尋ねた。「こんなふぶきの朝に、どのようにしておいでになったのですか。」

「まず、来ることを心に決めたのですよ。そうすれば、あとは簡単ですからね」と元気な声が返ってきた。〔クォート〕1973年1月26日〔英文〕P.5)

この簡単な実例に見られるように、すべての個人は毎日何を選ぶかの決定を下すように迫られていることに気がつく。そして、何を選ぼうとも、それは心の確信するところと比例するのである。

これらの確信は、すべての人の内部で絶え間なく葛藤を続けるふたつの力と関係がある。それは救い主が「神と富」*として言及した善と悪との力のことである。これらふたつの力は、神が造られたすべての創造物の中で人間だけが所有している力、すなわち理性を



もって考える力である。これによって人は選択することができる。それはその人がどのようにになりたいかを決める調節弁とも言える。理性により支配される力は、選択したものの質を決定する。こうして私たちが性質と呼んでいるものが形作られる。この選択の機会を指して、人の自由意志と呼ぶ。

「毎日が選択の日である。日々絶えず私たちは各自の選択の権利を行使しているからである。選ぶのにわざわざ投票所まで出かけていく必要はない。……人は自分自身の選択によって成功もし、失敗もする。……あなたは自分の仕事について知識を増すこともできるし、そうしないでもいられる。正直であることも、不正直であることもできる。働いて得たお金の一部を貯金す

ることも、しないでもいられる。常に最善を尽くすこともできるし、そうしないでもいられる。従って、あなた自身の選択によって、敗北者にも勝利者にもなれるのである。」(ジム・ラブ, 「R&R マガジン」アメリカの探究と評論社, 第10巻〔英文〕P.64)

天父も初めからこの自由意志の原則の真意を御存知であった。それについて、聖典にはかなり詳しく書かれている。

「さて、主はわれアブラハムに、この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。而して、これらすべてのものの中には、高貴にして偉大なるもの多くありたり。

神、これらの霊を善しと見たまい……これらの者の中に、神の如き者一人立ちて共に在りし者たちに言いけるは、われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して、最初の位を保つ者は更に附け加えられ、最初の位を保たざる者は、

最初の位を保つ者と同じ王国にて栄を得ることなからん。而して、第二の位を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん。

主、宣いけるは、われ誰を遣わさんか。一人、『人の子』の如くに答えて言いけるは、われここに在り、われを遣わしたまえ、と。(アブラハム 3: 22—27)。「父よ、御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ」(モーセ 4: 2)

「……別の一人答えて言いけるは、われここに在り、われを遣わしたまえ。」(アブラハム 3: 27)

「われ汝の子と成らん。われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。われ正にかくの如くすべし。これを以て、われに汝の誉を与えよ。」(モーセ 4: 1)

「……主宣いけるは、われ先の者を遣わさん。

而して、第二の者怒りて、その第一の位を保たず。」(アブラハム 3: 27, 28)

「而して彼はサタンと成れり、実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし、以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」(モーセ 4: 4)

サタンは神に叛き、「主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんと」した。(モーセ 4: 3)

不幸なことに、多くの人が、人の自由意志の賜物という特質と祝福について理解していない。もし私たちが物事の道理をわきまえるならば、それだけで次の考えに表わされている真意を悟

るだろう。「選択は、人間の尊厳の主要素である。選択の能力がなければ、人間は一個の人間にも遠く及ばない存在と化してしまう。自由意志の行使がなければ、人は自分がどのような者になれるのか、あるいは何をなすことができるのかを知ることはいできない。選択こそ未来の鍵である。」(ジョージ・E・ファーリング、『若者よ、なせばなる』、「ウエズレー・メソジスト」〔英文〕より)

人の自由意志の源が神にある以上、私たちは、分別ある選択をするのを助けてくれる最良の仲立ちとして神に頼らないわけがあるだろうか。神が私たちに与えて下さったこの仲立ちとは、聖典の中に記録されている予言者により語られた言葉である。安息日に病人を癒したから聖日を守らないとイエスを非難した昔の不信心なユダヤ人たちに、イエスはこのことを告げられた。イエスは彼らを叱責して、こう言われた。

「わたしをつかわされた父も、ご自分でわたしについてあかしをされた。あなたがたは、まだそのみ声を聞いたこともなく、そのみ姿を見たこともない。

また、神がつかわされた者を信じないから、神の御言葉はあなたがたのうちにとどまっていない。

聖典を調べなさい。なぜならあなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思っているからである。また聖典は、わたしについてあかしをするものである。

しかも、あなたがたは、命を得るた

めに、わたしのもとにこようもしない。」(欽定訳ヨハネ 5: 37—40)

彼らの問題に対する答えを導き出す鍵は聖典に見出される。主は彼らが所有一している聖典を受け入れないことを叱責された。自らの主張するところを論証するにあたり、その知識は聖典の中に見出されるのである。パウロがテモテへあてた勧告に耳を傾けてみよ

「主は、私たちが主の福音に精通し、福音を試し、証明し、共に分かち合い、さらに決定を下すときの判断の基準として、福音を生活にとり入れるよう望んでおられる」

う。

「また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救いに至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。

聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。

それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである。」(Ⅱテモテ 3: 15—17)

神の王国を建設するにあたり、聖典は私たちの伴として、信仰、契約、決断、指導力の源となり、決断を下すときに基準となる原則を私たちに示してくれるのである。聖典の中から非常に

良く知られているいくつかの実例を引用してみよう。信仰の模範として、非常に裕福であり、同時に神を畏れ、世の富と家族に恵まれていたヨブが挙げられる。彼は一夜のうちに、この世のすべての所有物と、子供たちを失い、

それから信仰と現実の相半ばする状況に自らの身をさらさなければならなかったのである。

「ヨブは起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、そして言った、

『わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな』(ヨブ1:20, 21)

さらに彼が肉体的な病いの苦痛にさいなまれていたとき、妻は言った。

「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい。」しかしヨブは彼女に言った。「あなたの語ることは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸を受けるのだから、災をも、うけるべきではないか。」(ヨブ2:9, 10)

さらにヨブは苦痛のさなかであって次のように証を述べている。

「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち、わたしは肉に在りて神を見るであろう。」(欽定訳ヨブ19:25, 26)

契約の模範として、ルツの、しゅうとめナオミに対する献身以上に人の心を打つものはない。ルツの夫が死んだので、ナオミはルツに実家に帰るように言ったとき、ルツはナオミのもとを離れず、言った。

「あなたを捨て、あなたを離れて帰ることをわたしに勧めないでください。わたしはあなたの行かれる所へ行き、またあなたの宿られる所に宿ります。あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。

あなたの死なれる所でわたしも死んで、そのかたわらに葬られます。もし死に別れでなく、わたしがあなたと別れるならば、主よ、どうぞわたしをい

「ヨシュアは
選択の模範に
よって好戦的
な民の心を改
めさせた」



くえにも罰してください。」(ルツ1:16, 17)

また王妃エステルは、彼女の同族の民を滅亡より救う決心をしたとき、断食して神に助けを求め、モルデカイに言った。「あなたは行ってスサにいるすべてのユダヤ人を集め、わたしのために断食してください。三日のあいだ夜も昼も食い飲みしてはなりません。わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしがもし死なねばならないのなら、死にます。」(エステル4:16)

また選択の模範によって好戦的な民の心を改めさせた指導者ヨシュアは、その民にこのように語った。「それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもって、主に仕え、あなたがたの先祖が、川の向こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい。」

もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、いまあなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」

そこで民はヨシュアに言った。「われわれの神、主に、われわれは仕え、その声に従います。」(ヨシュア24:14-16, 24)

これらは聖典に見出される数多くの実例のほんの一部にすぎないが、傑出したこれらの人物の証を調べてみるだ

けで、私たちは彼らの強さに励まされるのである。これらを冷静な気持で分析してみれば、彼らの生活が正しい選択により築かれていなければならなかったことがわかる。彼らは真理に堅く立っていた。彼らの模範は私たちにこの上ない教訓を与えてくれるのである。

主は私たちに仰せになった。「さあ、われわれは互に論じよう……」(イザヤ1:18) 主は私たちが共に主の教えに心を傾け、思いはかることを望んでおられる。「……人々をこの先神の現わしたもう光栄に与る者となさんため、主は平易簡明に説きたるその完全の福音、その永遠の誓約を世に遣れり。」(教義と聖約133:57)

主は、私たちが福音に精通し、福音を試し、証明し、共に分かち合い、さらに決定を下すときの判断の基準として、福音を生活に取り入れるよう望んでおられる。これによって人は真理に基づいた選択をすることができる。動機が真理に固く結びついているとき、そこには人を感服させる正当な論拠があり、それは私たちの心を正し、生活をよりよいものへと導き前進させる。論証は真理としか共存できない。誤りや邪悪の論証を試みて、心の暗黒へと導く誤りと邪悪は依然として存在するのである。人が真理を試した後に、「われわれを離れよ、われわれはあなたの道を知ることを好まない」(ヨブ21:14) と言い得るとは理解し難いことである。

悲しみを言い表わしている聖句のひとつに、キリストがこう言われたもの

がある。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう。」(マタイ23:37, 38)

この聖句は、わかっていながら主のもとに来て論じようとし、今の時代の人々にもあてはめられる。

神に対して心を向け、次のヨハネの言葉に耳を傾けようではないか。

「愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。」

そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。

その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互に愛し合うべきことである。

神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。(1ヨハネ3:21-24)

イエス・キリストの御名によって。
アーメン。

*ルカ16:13に見られる「富」の英語訳は“mammon”で、悪徳としての富を表わす。(訳者注)

新しい年を迎えて

明けましておめでとうございます

日本伝道部



日本伝道部長

トモスエ・アボ

日本名古屋伝道部



日本名古屋伝道部長

佐藤 悟

日本中央伝道部

最も大切な証

日本中央伝道部長

清水 勝



私が初めて末日聖徒イエス・キリスト教会を知ったのは、1942年、第二次世界大戦が始まって家族がユタ州に移ったときで、ちょうど私が9歳になる前の事でした。そういう時節柄、日本人に対して迫害の多いときであり、ユタ州は日本人が自由に住めるよう歓迎した数少ない州のひとつであったとはいえ、感情的な面はどうしようもなく、住む家を借りるのは並大抵な事ではありませんでした。しかし、流れついたスプリングビルという町のひとりの監督は、真の意味でのモルモンでした。多くの人々の非難にも耳をかさず、私たち一家に家を貸して下さいました。こうしてモルモンと呼ばれる人々との密接な交際が始まったのです。

私の若い頃の興味はスポーツの一点張りでしたから、教会

の、特にスポーツにつながっていた同級の若い学生たちの親切的なフェローシップと模範によって改宗への道をたどりました。私の改宗は何年もの月日がかかりました。しかし、今でも有難いと思う事は、モルモンの人々が私を見捨てないで、忍耐強く真の兄弟姉妹として愛し導いて下さった事です。

14年前のことですが、最初の伝道地室蘭の厳しかった冬を今でも忘れません。この冬の室蘭で私は何回もの心からの祈りの後、聖霊が天降り、私の体一杯に満ちて、真に神は生きてまし、イエス・キリストはまことにこの世の救い主であらせられ、この末日聖徒イエス・キリスト教会がこの末の世に真の神の予言者ジョセフ・スミスによって回復された唯一真の神の教会であるとのゆるがぬ証を得たのでした。人に伝え教えるためにこの証が必要でした。この証ほど私の生涯で大切なものではありません。そして全世界の人々に声を大にしてキリストの福音こそ人に不死不滅の命を与え、真の幸福に至らせる唯一の道であるとイエス・キリストの御名によって証いたします。アーメン。



日本東伝道部

年頭のメッセージ

日本東伝道部長

小泉小太郎

世界が新しい年へ向かおうとしているときにあたって、私は日本のすべての聖徒たちに、来たるべき年がすばらしい繁栄の年となりますよう心からの願いをこの機会に表明したいと思います。

私たちは本当に幸いにも末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となり、私たち自身とまた隣人の救いと昇栄に欠くことのできない福音の真理と儀式を有しております。さまざまな問題、苦痛、苦悩、誘惑に満ちた新しい年に直面するときにも、願わくは、私たちがイエス・キリストの福音を学び、研究し、福音に従って生活することができますように。またそれによって善と悪とを見分け、悪魔の誘惑を避け、悪の力から離れることができますように願っております。へりくだり

祈ることによって、善悪を判断するために必要な導き、啓示能力を絶えず受けることができるに違いありません。もし私たちが弱い肉体を持つがゆえにサタンの誘惑に引きずられそうになるときがあるならば、愛と慈悲に満ちた天の御父を思い起こそうではありませんか。天父は弱点を持つ私たちを許してくださるでしょう。私たちは自分の誤ちを認め、天父の許しを求める勇気を持ち、そして真理に堅くとどまろうではありませんか。

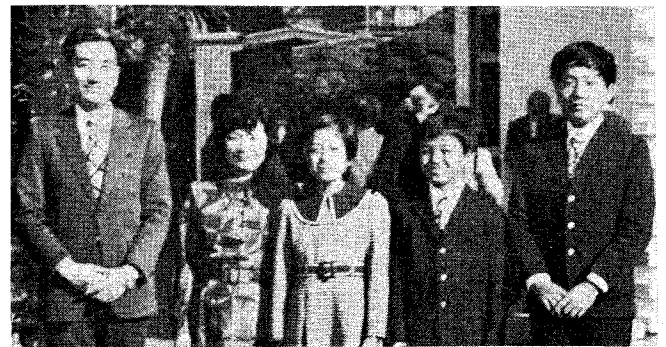
私たちが常に忠実で従順であるときに、イエス・キリストの真の弟子としてとどまる強さとみたま、そして証を受け、多くの祝福を受けることができますよう、私は謙遜にお祈りいたします。

東京ステーク部

主の恵み

東京ステーク部長

田中健治



この世のあらしに揉まれ、望み絶えて失せし時……

あなたのエピソードについて話して下さいと言われた時、私の胸に去来したのは数え切れない程の主の恵みを受けた出来事でした。それらのどの一つを取っても私の家族にとっては主の与え給うた、そして自ら喜んで参加したこの地上の生涯の花園に咲くばらや百合、すみれやタンポポのように心豊かにして下さるものです。

それは2年余りの入院生活の終りも間近いと思われ、失った視力も奇跡的に1.0と回復し、入院中に周囲の方々からも祝福されて婚約した清江姉妹と楽しい交際を続けていたことでした。1年以上も絶えてなかった左眼底出血が何の前おれもなく、13回目として起こりました。美しい、見なれた視野が見るまに赤黒い渦で浸され始めたときの怖れはその経験をお持ちの方でなければお分かりにならないでしょう。直

ちに絶対安静になり、わずかの精神の動揺も、血圧に変化を与えて網膜の毛細血管の再生を害するため、防がなければなりません。しかしベッドでの祈りは、すぐ心のささやきとして答えられました。『田中兄弟！ 信仰を強くして行きなさい、恐れることはありません。』今回の出血は非常に多くて完全に視野を消しました。静かに休みながら、これが私にとって何の恵みであるか考えておりました。鍛えることはできる。しかし退院は長期間の延期となるだろう。両親や兄弟たちにもまた犠牲を払わせることになってすまない。毎日診察してもらっているお医者さんたちでも予測できないとしたら、この病気の本性の両眼失明にだってなるのではないか。どのようにして眼の見えないものがこの不景気の時代に結婚をし、家庭を維持できるだろうか。その可能性の確信がないとしたら結婚するとの約束は相手のために重荷を負わせるか

ら先の見込みがつくまで解消した方が良くのではないか、いや私たちは永遠の祝福を生み出すための強い協力の約束をしたのだから続けて行くべきなのだろうか、等々……。とそのとき、田中健治さんっているかしらと病棟の廊下から声が聞こえてきました。ここですよと同室の僚友だちが安静の私に代って返事してくれました。「ハイ、素適なお手紙ですよ」と看護婦さんが渡してくれました。残された片眼で静に眺めると、昨日もお見舞いに来てくれた清江姉妹からのものでした。「あなたがまたひどい出血をしたと聞いてびっくりしました。でも私はもっと勇気が出ました。もともと私は相手が良い人であるなら片足でも片眼でも良いと思っていたのですから、私は何でも助けてあげたいと思います。今あなたが悪い状態であっても私はちっとも変りません。」私の心には暖か

な喜びと将来への希望がしみ渡り、真黒な視野を忘れさせてくれました。その日もさりげなく見舞いに来てくれた姉妹の手をとって手紙をありがとうと言った私の心には、必ず戦い抜いて見せると心に決めた前世での躍動がこうだったのではないかと思っていました。

それから17年、私たちは結婚し、3人の子供を送られ、自宅に住み、愛する兄弟姉妹や友だちと共に熱心に経営し発展させつつある会社も与えられています。

私は神様が父として実在され、その子供たちの発展のためにキリストを贖い主、救い主として送られたことを証いたします。また同じように末日聖徒イエス・キリスト教会は神の唯一の教会であり、リー大管長は現在の予言者であることを証いたします。



日本西部伝道部

福音に生きる

日本西部伝道部長

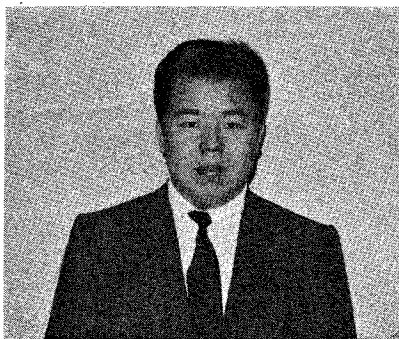
アーサー・K・西本

古き年が過ぎ去り、新しい年を迎えるにあたって、私たちは受けた数限りない祝福、イエス・キリストの福音によって日常生活にもたらされている喜び、まことの幸福、知識、教えに従うことによって得た進歩について考え、天父に感謝しなくてはならない。

私は今、15歳になるひとりの少年のことを思い出している。ある日のこと、その少年の友達の母親が宣教師たちの衣類を洗濯しているときに、宣教師がその家を訪れた。友達を通じてこの15歳の少年は教会に興味を持つようになり、MIA、日曜学校、聖餐会に出席し始めた。宣教師はこの15歳の少年の友達を数人集めて、祈ること、2分半の話の話し方やスポーツマン精神などを教えた。しかしこの少年はバプテスマを受けようとしないうちに、やがて17歳になろうとしていた。彼は教会の集会に出席続け、福音の原則を勉強し、この小さな支部の会員や宣教師から暖かく見守られていた。人々の忍耐と愛と理解を受け、両親の許しを得て、彼は宣教師と初めて会ってから約2年後、ついにバプテスマを受けた。

彼がバプテスマを受けて間もなく、第二次世界大戦が勃発した。彼はほかの兄弟たちと共に国家を守るため軍隊を志願した。やがて戦争は終り、兄弟たちは除隊された。だがこの青年は軍隊に留まる決意をした。兄弟たちとの軍隊生活を通じて彼は多くの得がたい体験をし、職業軍人になる決意をしたのである。そうして時が過ぎ、彼は教会員として進歩を続

け、やがて結婚し、家庭を持った。最初宣教師から一緒に教えを受けたこれら少数の青年たちは、それぞれ教会で得た喜び、体験をいつも分かち合っていた。やがてこの青年は日曜学校、神権会で教師の召しを受け、長老定員会会長、監督、ステーク部伝道部長、ステーク部高等評議員、軍人地方部の地方部長など、軍隊にいた間に数々の召しを受けた。彼は世界中を旅する時も自分が「モルモン」であることを決して忘れず、天父に全力を尽くして仕え続けた。彼は天父に仕える機会が与えられることがどれほどの祝福であり、それによって家族が強められ、証が強められ、家族ひとりひとりが強められていることを知っていた。やがて長男と次男が伝道に召され、伝道を終えた。同時に、共に教会に加わった数人の少年たちも、宣教師、監督、ステーク部高等評議員、ステーク部長会、伝道部長、そして今日地区および伝道部代表の召しを受け、家族と共に祝福にあずかっている。イエス・キリストの福音は何とすばらしい喜びと幸福をもたらすのであろうか。これこそ「福音に生きる」ことであり、主の御業を行なうすべての人が味わうものである。なぜならば、教えを受けた宣教師また共に助け励まし合った友達を忘れられず、いつくしんでいるこの15歳の少年は今日、心からの感謝の気持を持ち、ひとりの僕として日本西部伝道部長として働き仕えているからである。



大阪ステーキ部

新年のあいさつ

大阪ステーキ部長

神 尾 昇

親愛なる兄弟姉妹、今私は1961年5月号の聖徒の道を聞きながら、私の改宗したときのことを思い返しております。

21歳の春、私はある商社の食品担当経理マンとして神戸に勤務しておりました。もちろん宗教などには興味もなく、その日その日を楽しく、友と相語り、酒を飲み、麻雀に明け暮れ、これが私の人生、青春であると疑いもしませんでした。そうしたある日、同僚のひとりが不節制による結核で病に倒れてしまい、私はその事実を知って愕然としました。これで良いのだろうか？ 解答は間もなく与えられました。

1960年3月6日、昼休みの街角でひとりの外人から1枚のパンフレットを受け取りました。何げなくポケットに入れ、オフィスに戻ってから思い出して読んでみました。最初に入ったのは英会話無料レッスンの文字でした。さっそく六甲にある教会を訪問してみました。そこには私が考えていた教会とはあまりにもかけはなれた建物があつた、入ろうか入るまいか一瞬迷っておりますと、中からひとりの兄弟が出て来て、私の手を取り招き入れて下さいました。部屋の中には昼間私にパンフレットを渡してくれた太った外人もおりました。彼はマイヤース長老と名のられ二度ビックリ。長老とは白い顎髭でもはやした年老いた人だと思っておりましたので…。またその同僚は背の高い人で、彼もポーター長老と名のられました。デブとノッポの外人との出会い、これが私の人生を変えたのです。正式に英会話に出席したのはこれが最初であり最後となつたのは何とも不思議に思えてなりません。ふたりの宣教師とはすぐに家庭集会の約束をし、ここに新しい未知の世界があることを知りました。レッスンが進むにつれ、大きな障害が出て来ました。そうです「知恵の言葉」という戒めです。私は職業柄、世界各地の嗜好品が安く手に入るのてコーヒー、紅茶は大好きでした。コーヒーなどはブラックで飲み、それがキリマンジャロかモカであるかなど銘柄を当てることもできたほどです。この戒めには抵抗を感じもう教会へ行くのはよそうかと思ったりもしました。しかしマイヤース長老は私にこうチャレンジしたのです。「私達も飲んでおりません。」この言葉は私の競争心を大いに奮い起こしました。同年齢という関係で、ある種のライバル意識があつたのでしょう。私もつられて「じゃあ、私も今日限り止めます」とふたりの宣教師に約束してしまいました。そうして

4月17日、末日聖徒の一員となつたのです。最初の3カ月、私には大きな誘惑が沢山ありました。会社の同僚たちは、私が変わつたことを始めたと、からかい半分に「モルモンさん」と呼んだり、ある先輩は私に面と向い「オイ、おかしいことを始めたな。きっと3日も続くまい」と言いました。しかし3ヶ月が過ぎ1年にならんとする頃、彼らの考え方も変わつて来ました。陰口をきく者もなくなり、軽蔑は驚異に変わり私への理解者は急激に増えていきました。それからの彼らは実に良く私を助けてくれました。宴会の席では私のために教会のこと、戒めの事をお客に話してくれるようになりました。こうして第一の難関を突破しました。

第二の難関はある土曜日の朝突然私を襲いました。原因もわからぬ高熱がでて立ち上がることもできません。会社を休み、生れて初めての往診をしてもらいました。過労と悪性の風邪のためであろうと老医師は診断を下し、2、3日絶体安静を命じて帰られました。私は高熱のためボーとした頭で明日のことを考えておりました。当時、非専任宣教師（ステーキ部宣教師と同じような責任）の責任を与えられ、毎日曜日初めて教会を訪れる人たちのクラスの先生をしており、家庭集会の約束もたくさんありました。日曜日の朝になつても熱は下がらず、体温計は39度を指しておりました。しかし集会の時間がせまってきたとき私は「立て」という主の声を聞いたように思い、全身の力をふりしぼって立ち、身仕度もそこに寮母さんにみづからぬように芦屋の独身寮をぬけ出しました。芦屋から六甲までの時間の長かつたこと、全身から油汗を流し、よろめきながら歩く姿に、きっと多くの人は不審の念をいだいた事でしょう。しかし不思議なことに教会に近づくにつれ、私の体内に力が湧いて来ました。踏みしめる足に力強さがよみがえり、無事に全責任を果たすことができました。私の第2の改宗でした。この事から、どんなに苦しくとも、つらくとも「道はある、主は常に私達と共にある」という確信を持つことができました。

私の第2の人生は、これらの困難や誘惑を克服し、打ち勝つことによって始まりました。青春を謳歌する若き兄弟姉妹たち、輝やかしい明日に向つて力強く信仰の道を歩まれるよう、切に願っております。

